心と文化

村　瀬　俊　樹*

Mind and Culture

Toshiki MURASE

要　旨

本論文は，日本をはじめとする東アジアと北米をはじめとする欧米の人々の心のあり方について，包括的認知と分析的認知，相互協調的自己観と相互独立的自己観という観点から，その特徴を比較した。具体的には，対象認知における文脈の役割，人の認知における特性の役割，素朴弁証法，自分に関する認知・感情・評価，他者感情の認知，対人葛藤状況での対処方略，制御焦点に関して，これまでに明らかにされてきた研究結果に基づいて論じた。そして，そのような特徴が生じ，維持されている要因として，社会生態学的アプローチの観点から生業形態と関係流動性を取り上げてその影響を論じるとともに，まわりの人たちに推測する信念や態度が自分の心のあり方に及ぼす影響についても論じた。今後の課題として，文化における心の特徴を成立させる発達的な基盤を明らかにする必要性が論じられた。

【キーワード：包括的認知，分析的認知，相互協調的自己観，相互独立的自己観，社会生態学的アプローチ，推測された信念・態度】

はじめに

文化心理学の成立

科学的な心理学は19世紀以降進展してきたが，基本的に，人の心の仕組みは人類に共通した普遍的なものであるという前提に立っていた。これまで，欧米(特に北米)を中心として様々な研究が蓄積されてきたが，研究協力者となってきたのは，おもに欧米(特に北米)の人たちであった。また，科学的な心理学では，ある特定の要因が人の心にどのような影響を与えるのかを明らかにしようとしてきた。そのため，実験室において他の要因は一定に保ち，厳密にある要因群だけを変化させ，その要因群が心に及ぼす影響を明らかにするという方法を主として用いてきた。

しかしながら，人の心は，その人が生活する場の文脈や，より大きな地域や社会のあり方という生態学的環境の影響を大きく受け，心の働きはそのような生態学的環境において意味を持つことが認識されるようになってきた。また，人の心は，その人が生活する社会が歴史的に構成してきたプロセスの一部であり，その社会が歴史的に蓄積してきたものの影響を受けるとともに，その人の心のあり方も社会が歴史的に蓄積するものに関与していることが認識されるようになってきた。

歴史的に蓄積したものの中には，知識，人間観や教育観などものごとの見方や価値の置き方，社会制度，相互作用のパターン，慣習，道具などの人工物など様々なものが含まれており，ここではそれらの総体を文化と呼ぶが，人々の心は文化の中を生きる中で作られていくとともに，人々の行動そのものが文化を構成していくと考えられるようになって来たのである(北山, 1998; 増田・山岸, 2010)。

このようなことを背景として，欧米(特に北米)の人々を対象とした研究で見いだされてきた知見が，他の文化の人々にも当てはまるのかということが大きく問われるようになってきた。中でも，日本・中国・韓国を含む東アジアは，それぞれに違いはあるものの，古代中国の思想や中国を介して伝えられた仏教の影響を受けており，欧米の文化とは異なる文化を構成しているため，欧米の人々の心のあり方と東アジアの人々の心のあり方を比較してその共通点と違いを明らかにし，それ

*島根大学人間科学部

ぞれの心のあり方はそれぞれの文化でどのような意味を持つのか，それぞれの心のあり方はどのようにして成立したと考えられるのかということが検討されるようになってきた。

東アジアと欧米に限らず，異なる文化の人々の心のあり方を比較し，その成り立ちやその心の働きがその文化で持つ意味を明らかにしようとする心理学の分野は文化心理学と呼ばれている。本論では，東アジアと欧米の中でも特に日本と北米の人々の心のあり方を比較した研究を中心に取り上げ，必要に応じて，中国や韓国，西ヨーロッパ，そしてそれ以外の地域の人々を対象とした研究も取り上げて，東アジアと欧米の人々の心のあり方を比較し，それが成立してきた要因やそれぞれの心の働きがそれぞれの文化で持つ意味を検討することとする。

包括的認知と分析的認知

東アジアと欧米の人々の心の違いとしては，第1に，ものごとをまわりの文脈との関係で認知しようとするのか，ものごとそれ自体の特徴に注目するのかということがある。たとえば，町の中で鹿に出会ったとして，他の鹿たちとの関係やまわりの藪や建物配置との関係でその鹿を認知しようとするのか，その鹿自体に注目してその特徴を認知しようとするのかという違いである。東アジアの人の方がまわりの文脈との関係でそのものを認知する傾向が強く，欧米の人の方がそのもの自体を認知する傾向が強い。

第2に，第1のことと関係するが，ものの動きをそのものが置かれた状況によって説明しようとするのか，そのものの特性によって説明しようとするのかという違いがある。たとえば，ある人が他の人に対して攻撃的な言動をしたとして，その人が置かれた状況がストレスフルな状況であるからという説明をするのか，その人が攻撃的な人だからというその人の特性で説明するのかということである。状況による説明は東アジアの人の方が行う傾向が強く，特性による説明は欧米の人の方が行う傾向が強い。

第3に，世界のさまざまなものごとをまとめ上げるときに，ものごとともものごとの類似性や関係性に基づいてまとめようとするのか，あるルールに基づいてものごとを分類カテゴリーとしてとらえてまとめようとするのかという違いがある。たとえば，鉛筆，消しゴム，ボールペンがあったとして，鉛筆と消しゴムは書いたりそれを消したりする関係にあるものとしてまとめられ，鉛筆とボールペンは筆記具という属性でまとめられる。ものの特徴や特性に注目しやすいということは，ある属性を持つかどうかというルールに基づいて分類カテゴリーで世界を整理しやすくなるため，欧米の人の方が分類カテゴリーとしてまとめる傾向が強く，東アジアの人の方が類似性や関係性に基づいてまとめる傾向が強いと考えられる。

第4に，ものごとは変化することが当然であると考えるのか，ものごとに不変性を認めようとするのかという違いがある。たとえば，あることがうまくできなくても練習すればもっとうまくなると考えるのは，できる・できないは変化するのが当然という考え方である。一方，あることがうまくできるかどうかはその人の能力によるものであまり変化させることはできないと考えるのは，できる・できないに不変性を認めようとする考え方である。変化することを当然とする考え方は東アジアの人の方が強く，不変性を認知する傾向は欧米の人の方が強い。

第5に，ある1つのものごとにも善悪両面があり，1つのものごとに対しても視点の置き方によってとらえ方が異なるので矛盾する考えが存在するのは当然で，どちらにもそれなりの理はあると考えて矛盾する考えの間の中庸を見出そうとするのか，矛盾する考えのそれぞれについて，論理的にその妥当性を検討して，ある考え方は認めて他の考え方は否定しようとするのかという違いがある。たとえば，単純化して言うと，ある状況で困っている人を助けることはその人の自律性をサポートする側面があると同時にその人の自律性を損なう面もあると考えて，どちらも考慮して対応をするのか，2つの側面の可能性を検討して，そのケースでは自律性をサポートすることになるまたは自律性を損なうことになると結論付けて対応をするのかということである。矛盾する考えの両者ともにそれなりの理はあり中庸を見出そうとするのは東アジアの人の方が強く，矛盾する考えを戦わせ，一方を正しいと認めもう一方を否定しようとする傾向は欧米の人の方が強い。

以上のように，文脈との関係でものごとを捉える，ものの動きをそれが置かれた状況によって説明しようとする，類似性や関係性に基づいてものごとをまとめようとする，ものごとは変化するのは当然であると考える，ものごとは多面的でありあるものごとに関する矛盾した考えのそれぞれにそれなりの理があると考える認知傾向は包括的認知(holistic cognition)と呼ばれる。また，ものごとそれ自体に注目する，ものの動きをそのものの特性で説明しようとする，ルールに基づいた分類カテゴリーでものごとまとめようとする，ものごとに不変性を認めようとする，あるものごとに対する矛盾した考えは論理的に検討して一方を正しいと認めもう一方を否定しようとする認知傾向は分析的認知(analytic cognition)と呼ばれる。包括的認知は東アジアの人々の方が欧米の人々よりも強く，分析的認知は欧米の人々の方が東アジア

の人々よりも強いことが様々な研究によって明らかにされている（Miyamoto, 2013; Nisbett, 2003; Nisbett et al., 2001）。

相互協調的自己観と相互独立的自己観

東アジアの人々と欧米の人々の心の違いについて，特に，自分や他者，および，自他の関係性に注目した場合，東アジアの人々の方が相互協調的自己観（interdependent construal of the self）を抱いている傾向が強く，欧米の人々の方が相互独立的自己観（independent construal of the self）を抱いている傾向が強いと言われている（Markus & Kitayama, 1991; 北山 , 1998）。

相互独立的自己観では，自己は，社会的な文脈からは独立した自律的なものであると考えられており，それぞれの人の性格，能力，感情，考え方，好みなど内面的なものは，その人独自のものであり，どのような人に対しているかとかどのような社会的な状況に置かれているかということを超えて，変化せず安定したものであると考えられている。一方で，相互協調的自己観では，自己は，他者や社会的な状況と結びついたものであり，その人の内面的なものは，どのような人に対しているかどのような社会的状況に置かれているかということに応じて変化するものと考えられている。つまり，相互独立的自己観では，ある人が「穏やか」であるとか「饒舌である」とかいうことは安定したその人の特性としてとらえるが，相互協調的自己観では，ある人は「家庭では穏やかで物静か」であるが，「仕事の場面では饒舌で多少挑発的」であるなどのように，その人の置かれた状況でその人の特性を捉える傾向がある。

したがって，ある人の振る舞い方は，相互独立的自己観では，その人の動機，感情，判断などその人の内的過程によって決定されていると考えるが，相互協調的自己観では，他者がどのような感情を抱き，どのように考え，どのような反応を示すかということをその人が考慮して，その人の振る舞いは決定されていると考える。つまり，相互独立的自己観では，その人がこのような目的を持っているからとかその人がこのように感じたからそのように振る舞っていると考えるが，相互協調的自己観では，その人はそのように振る舞えばまわりの人からこう見られるだろうと考えてそのように振る舞っているとか，その人は自分の立場ではそのように振る舞うことがまわりから期待されていると考えるからそのように振る舞っていると考える傾向がある。

また，相互独立的自己観では，独立した自己の独自性を認識し，それを他者に理解してもらうために自己主張を行うことが重要な課題となるが，相互協調的自己観では。他者とうまくやっていくことが重要であり，そのためには他者の考えていることや感情を読み取り，自分の考えや感情を統制して他者と協調・調和していくことが重要な課題となる。ただし，ここでいう他者とは必ずしも無差別的にすべての他者というわけではなく，とりわけ内集団の他者との協調性が重要視される。たとえば，相互独立的自己観では，自分はこういうことを好んでいて，こういうことが得意であって，こういうやり方で進めて行くことがよいと考えているという自分自身の独自の内面を主張することが課題となるが，相互協調的自己観では，このようなことが好みであるとか得意であるとか言うと自分が所属する集団の人々がどのように思うだろうかということを考慮して振る舞ったり，こういうやり方がよいと思うと発言することがこの場で適切かどうか場を構成する他者の反応を推測して表現したり控えたりすることが課題となる。

このような自己観の違いは，感情や動機づけのあり方にも関係している。感情について述べると，怒り，欲求不満，誇りという感情は，自分の欲求や目標が阻害されたり達成されたりした時に感じるものであり，自己に焦点が向けられた感情である。このような感情は相互独立的な自己観のもとで経験しやすく，その表出もされやすい。相互協調的自己観のもとでは，そのような感情は他者との調和を乱すものであり，表出することは抑制されがちとなる。一方，一体感や恥ずかしさという感情は他者との関係で生じるものであり，他者に焦点が向けられた感情である。このような感情に関しては，相互協調的自己観のもとで他者との調和を維持するために経験しやすく，表出もされがちだと考えられる。

動機づけについて述べると，何かを達成しようとする動機付けは，相互独立的自己観のもとでは，目標の達成のため，環境を支配するためのものとして現れるが，相互協調的自己観のもとでは，他者の期待に応えるために立ち現れることも多い。また，相互独立的自己観のもとでは，自己を肯定的に捉えることは，自分の内的特性を自己高揚的に捉えることで得ることができる（たとえば，自分は能力が高いと認知することが自分を肯定的に捉えることにつながる）。成功は自分が原因で失敗は外的な原因によってもたらされると考える自己奉仕バイアスも見られる。一方，相互協調的自己観のもとでは，他者との調和的な関係を維持し，状況にうまく適応し，自分の居場所を見つけることが，自己を肯定的に捉えることにつながる。また，相互協調的自己観のもとでは，自己奉仕バイアスを示さず，成功してもその原因を状況や他者のおかげと考えるというように，自己卑下や他者高揚の傾向を示すと考えられる（たとえば，今回こんなにうまくできたが，自分はまだま

だだめで，まわりのみんなが応援してくれたおかげだと考えるなど)。

包括的認知は相互協調的自己観と関連し，分析的認知は相互独立的自己観と関連している。次節からは，具体的な研究例を挙げながら，様々な心の側面について，東アジアの人々と欧米の人々の心を比較していくこととする。

対象認知における文脈の役割

私たちが世の中で生じている事象を認知するとき，その場面に存在する様々な情報の中から特定の情報を選択して認知している。たとえば，テニスの試合をテレビで観戦しているときは，プレイヤーとボールの動きを見ることが中心となるが，それぞれのプレイヤーのコーチ陣の動きを見て，この陣営は試合展開を有利であると判断しているなと推測し，そのプレイヤーには余裕があるのだろうと推測することもある。海外での試合の場合，観客の中に日本人らしき人の姿を多く見つけると，日本の人もこんなに多く見に来ているのだと思いながら試合を見ることもある。

様々な情報の中から特定の情報を選択し，その選択した状態を持続することは注意(attention)と呼ばれる。テニスの試合の例で言えば，プレイヤーとボールの動きという中心的な対象におもに注意を配分し，コーチ陣や観客という背景となる対象にも多少の注意を配分してテレビでの観戦をしていると言える。私たちは，テレビから送られてくるすべての情報に注意を向けるわけではない。たとえば，観戦中には，ラインジャッジがアウトを宣告しようとする動きをしたがやめたとか，観客の中に大きなサングラスをかけている人がいたとかいうことに気が付かなかったが，後で録画を見直してみて気付くこともある。この場合は，これらの情報には注意を向けず，プレイヤーやボールの動きに注意を集中して観戦をしていたということになる。

中心的対象と背景への注意配分

それでは，私たちが事象を認知するとき，中心的な対象と背景への注意配分の仕方は，文化によって異なるのだろうか。

Masuda & Nisbett(2001)は，あるシーンに対して，人が中心的な対象に注意を向ける程度と，背景の情報に注意を向ける程度について，日米の大学生を対象として比較検討した。実験では，海中を魚が数匹泳いでいる動画を研究協力者に見せた。その動画には中心的な対象となる大きな数匹の魚が登場するほか，小さな魚，動かない貝，海藻，岩，あぶくなどが描かれていた。研究協力者の大学生は，動画を見た後，動画には何が見えたか，説明するよう求められた。大学生が報告した内容を分析すると，中心的な大きな魚についての言及数に日米間で差は見られなかったが，日本の大学生は米国の大学生よりも，海藻や貝などの動かない生物や，水や岩などの背景情報に言及する数が多かった。また，最初にどういったことから話し始めるかを調べたところ，「3匹の魚が泳いでいます」のように，中心的対象となる魚から話し始めるのは米国の大学生の方が日本の大学生よりも多かったのに対し，「水の色は緑，池のような中を魚が泳いでいます」のように，ほとんど動かない生物や背景から話し始め，最初に場面全体の状況を述べてから中心的対象の魚について述べるのは，日本の大学生の方が米国の大学生よりも多かった。

画面のどこを注視しているのかを測定するアイトラッカーを用いた研究でも，日本の大学生は，ヨーロッパ系のカナダの大学生よりも背景を注視する時間が長く，中心的な対象である魚を注視する時間は短かった(Senzaki, Masuda & Ishii, 2014)。

これらのことから，日本の大学生は北米の大学生よりも，事象が生じている場面を見る時に，中心となる対象だけでなく，まわりの背景となる対象にも注意を配分する傾向があると考えられる。

記憶における文脈の役割

注意の配分だけでなく，記憶においても，日本人は米国人よりも背景の影響を受けやすいことが明らかになっている。Masuda & Nisbett(2001)では，ある風景を背景とした動物の静止画を24種類見せた。別の課題を2分間行った後，再認課題を行った。再認課題では，先ほど呈示された動物と呈示されなかった動物をそれぞれ見せ，呈示されていた動物か呈示されなかった動物かを判断させた。その際，呈示された動物をもとの背景と同じ背景に置いた場合，呈示された動物をもとの背景とは異なる新しい背景に置いた場合，呈示されなかった動物を他の動物で呈示された背景に置

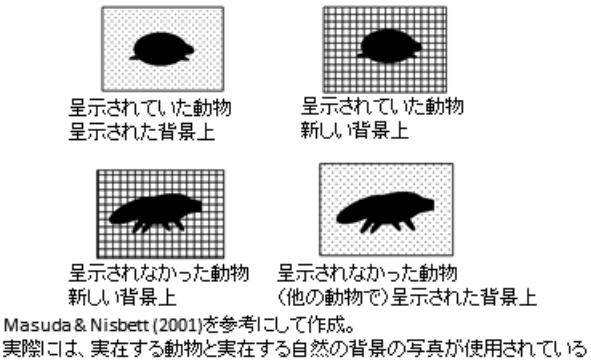

図1. Masuda & Nisbett(2001)で使用された写真の模式図

いた場合，呈示されなかった動物を新しい背景に置いた場合の４つの条件を設定した（図１）。

実験参加者は背景がどのようなものであるかは無視して，動物が先ほど呈示されたものであったかどうかを判断した。日本の大学生も，米国の大学生も，背景が新しい場合は，もとの背景に置かれた場合よりも，呈示された動物を呈示されていたと正しく再認できる成績が下がったが，成績の低下は日本の大学生の方が大きかった。このことは，日本の大学生の方がアメリカの大学生よりも，動物を背景との関係で記憶していることを表している。

長さの判断における文脈の役割

線分の長さの判断という認知課題においても，まわりの文脈との関係で認知するかどうかということに日米間での違いが見られる。枠の中の線テスト（Framed line test）では，ある大きさの正方形（たとえば１辺が 9cm）の中にその１辺より短い垂直線（たとえば 3cm）が上辺の中央から下ろされている図が研究協力者に見せられる。その後，研究協力者は別のテーブルへ移動し，先ほどの正方形とは異なる大きさ（たとえば 6cm）の正方形を見せられる（上辺中央からの垂直線は書かれていない）。絶対判断では，この異なる大きさの正方形の中に，先ほどの正方形に書かれていた垂直線と全く同じ長さ（つまり 3cm）の垂直線を上辺中央から書くことが求められる。相対判断では，先ほどの正方形に対する垂直線の長さの割合（垂直線は正方形の 1/3 の長さであった）と同じ割合で，この異なる大きさの正方形の中に，垂直線を上辺中央から書く（つまり 2cm の垂直線となる）ことが求められる（図２）。

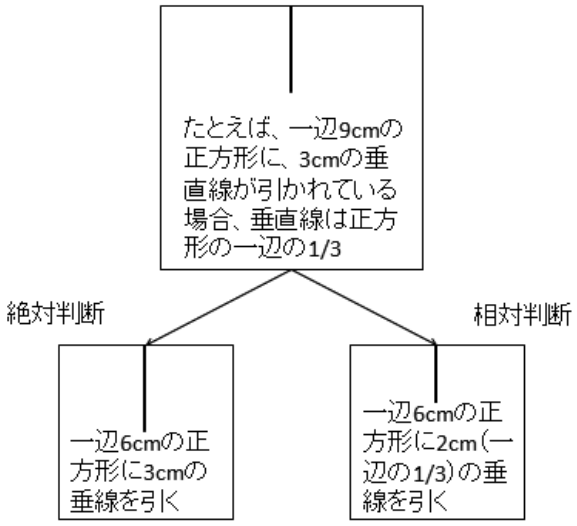

図 2. 枠の中の線テスト（Kitayama et al.,（2003）をもとに作成）

結果は，日本の大学生は相対判断の方が絶対判断よりも正解からの誤差が小さく，ヨーロッパ系アメリカ人大学生は絶対判断の方が相対判断よりも正解からの誤差が小さかった。また，絶対判断における正解からの誤差はヨーロッパ系アメリカ人大学生の方が日本の大学生よりも小さく，相対判断における正解からの誤差は日本の大学生の方がヨーロッパ系アメリカ人大学生よりも小さかった。これらの結果から，日本人大学生は垂直線をそれを取り囲む正方形との関係でとらえている，つまり，文脈との関係の中でとらえている傾向が強いのに対して，ヨーロッパ系アメリカ人大学生は，垂直線を正方形とは独立に，つまり文脈とは独立にとらえている傾向が強いと考えられる（Kitayama et al., 2003）。

美的判断における中心的対象と背景

私たちが人物の写真を撮るとき，画面の中で人物をどの程度大きく撮るだろうか。また，人物の背景はどの程度広範囲に写そうとするだろうか。

Masuda, Gonzalez et al.（2008）は，日本の大学生と米国の大学生に，人物が写った写真のよさを評定させた。写真のセットは４枚からなり，どれも同じ人物が同じ大きさで写っているのだが，背景が広角で広く映っているか，狭い範囲で映っているかが異なっていた（写っている背景はどれも同一の背景だがどの範囲まで写っているかが異なっていた）。結果は，背景が最も狭い範囲で映っている写真に対しては，日本の大学生の方が米国の大学生よりも評価が低かった。

また，別の４枚のセットでは，どれも同じ背景が同じ広さで写っているのであるが，人物が大きく映っているか小さく映っているかが異なっていた（写っている人物はどれも同一人物である）。この場合は，人物が最も大きく映っている写真に対する評価は，日本の大学生の方が米国の大学生よりも低かった。

これらの写真では，人物が中心的な対象であると考えられることから，これらの結果は，日本の大学生の方が，中心となる対象を狭い背景の中で捉えた（人物が置かれた文脈をうまくとらえることができない）写真を美的に好ましくないと考え，中心となる対象に焦点化してそれを大きくとらえた写真を美的に好ましくないと考える傾向が強いことを表している。

この研究はまた，大学生に風景画を描かせ，地平線の描かれる位置に注目している。地平線が高いということは，人物や様々な文脈を構成する事物を描く空間が画面の中で広くなるということであり，多くの事物を描くことが可能となる。一方，地平線が低いということは地上に存在するものを描くスペースが狭くなることを意味する。したがって，対象を文脈との関係でとらえる傾向が強い日本を含む東アジアの人の方が，対象を独立

したものとしてとらえる傾向がより強い北米の人よりも地平線を高く描くことが予想される(図3)。米国の大学における東アジアからの留学生と，おもにヨーロッパ系の大学生(アフリカ系の大学生も含む)に風景画を描いてもらったところ，予想通り，東アジアからの留学生の方がヨーロッパ系の大学生よりも地平線を高く描く傾向があった(Masuda, Gonzalez et al., 2008)。

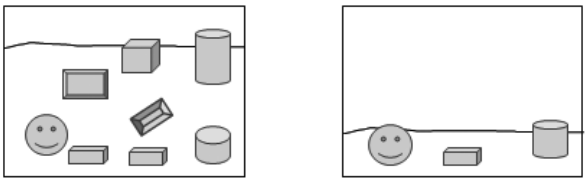

図 3. 地平線を高く描いた絵(左)と低く描いた絵(右)の模式図(Masuda, Gonzalez et al.(2008)を参考にして作成)

対象認知において文脈が果たす役割の文化差はいつ生じるか？

それでは，対象認知において文脈が果たす役割の文化差は，発達のどの時点で生じてくるのだろうか。まず，成人において日本と北米との間で文化差の見られた課題と同様の課題を子どもに対して用いた研究から見ていくことにしよう。

場面に関する叙述において，中心的対象と背景にどの程度言及するかについては，4-5歳でも日米差は見られ，日本の子どもの方が背景の対象に言及する傾向が高かったが，6-7歳，8-9歳の方が日米差は明確であった(Imada et al., 2013)。一方，Masuda & Nisbett(2001)で用いられた水の中の光景と同様のアニメーションを見た後，日本とカナダの4-6歳児，および，7-9歳児が1人でアニメーションについて叙述した結果では，日本とカナダの子どもの間で有意な違いは見られなかった(Senzaki et al., 2016)。

枠の中の線テストを日米の子どもを対象として実施した研究では，6歳から13歳では，日本の子どもは相対判断の方が絶対判断よりも誤差が小さく，米国の子どもは絶対判断の方が相対判断より誤差が小さいというように成人と同様の傾向が見られた。一方，4歳児では日米間で差が見られず，どちらも相対判断の方が絶対判断より誤差が小さかった(Duffy et al., 2009)。

風景画における地平線の描かれる高さについて，日本とカナダの小学生を比較した結果では，小学1年生では，日本とカナダの小学生で違いは見られなかったが，小学2年生以降は，大人と同様に，日本の小学生の方がカナダの小学生よりも地平線の描かれる位置が高かった(Senzaki, Masuda, & Nand, 2014)。この研究では，あらかじめ風景に配置する対象を準備してそれを配置させるコラージュを作成させることも行っているが，地平線の描き方は，描画の場合と同様の結果だった。

以上のように，対象認知において文脈が果たす役割に文化差が見られるのかということについて，明確に何歳からということは言えず，幼児期から児童期にかけて文化の影響が強くなっていくと考えられる。一方，3・4歳頃からすでに対象認知のありかたに日米間で違いが見られるという研究もある。

対象をまわりの文脈から独立してとらえる傾向が強ければ，対象に含まれる部分の特徴から，その対象が何であるかを同定することがしやすくなると考えられる。一方，対象をまわりの文脈との関係でとらえる傾向が強ければ，ある対象が他の対象とどのような関係で配置されているかということを認識しやすいと考えられる。

Kuwabara & Smith(2012)は，ある対象が他の対象とどのような関係で配置されているかの認知を日米の4歳児で比較した。見本となる対象の配列として，たとえば，時計小・時計大・時計小のように，同じものが左右両端にあり，違うものが真ん中にある配列を見せ，この見本と同じようなものは，鍵・テレビ・鍵のように同じものが両端にあり真ん中が異なる配列と，テレビ・鍵・鍵のように同じものが右側に2つあり左側に異なるものがある配列のどちらであるかを選ばせた。その結果，日本の4歳児の方が米国の4歳児よりも，同じ配列のものを選ぶ割合が高かった。

一方，個としての対象を同定することのしやすさについては，ある場面の中にある特定の対象を見つける課題(たとえば，街並みの中から道路上のバスを見つける)では，米国の4歳児の方が日本の4歳児よりも見つける早さが早かった(Kuwabara & Smith, 2012)。また，犬や椅子などの対象を，数カ所を穴あきにして一部が見える状態にして他の部分を隠し，その対象が何であるかを3歳児に同定させる課題(図4)では，米国の3歳児の方が日本の3歳児よりも対象が何であるかを同定できる割合が高かった。対象の写真をパズルのように断片化してバラバラにし，その断片を1枚ずつ出してパズルを完成していきながら，その対象が何であるかを同定させる課題では，米国の3歳児の方が日本の3歳児よりも，より少ない枚数の断片で構成されたものから，その対象が何であるかを同定することができた(Kuwabara & Smith, 2016)。

図 4. 穴あき窓から対象を同定する課題(Kuwabara & Smith (2012)をもとに作成)

これらの結果は3,4歳の時期から，日本の子どもの方が,米国の子どもよりも,対象と対象の関係性のあり方を抽象化してとらえやすいと言え，米国の子どもの方が日本の子どもよりも，対象を個として文脈から独立してとらえやすく，対象の部分に関する情報からその対象が何であるかを認知する傾向がより強く見られることを示している。したがって，日本の子どもの方が米国の子どもより，まわりの文脈との関係で対象を捉える傾向が強く，対象を個としてまわりの文脈から独立して認識する傾向が弱いという文化差は3歳の時点からすでに生じ始めていると考えることができる。

対象認知における文脈の役割に文化差が生じる仕組み

それでは，このような文化差はどのような仕組みで生じるのだろうか。考えられることとして，親が子どもとの会話において，それぞれの文化における優位な注意配分の仕方を先導するような足場作り(scaffolding)を行い，子どもがその足場をもとにその文化における優位な注意配分の仕方を獲得していくという世代間伝達が行われているのではないかということが挙げられる。足場作りとは，子どもが何かの課題を自分で行うことができるように，自分でしなければならないことをまずは親の側がしてあげ，子どもがそこに参加する中で，やがては自分でその課題をできるようにとする親の行動である(Bruner, 1981)。つまり，日本の親は，水中で魚が泳いでいるアニメーションを見て,「ここはどこだろう？水の中だね」などのように，子どもに対して背景に注意を向けるような会話の設定を行い，北米の親は,「魚が2匹いるね，魚は何色かな？」などのように，中心的な対象に注意を向けるような会話の設定を行い，そういった会話に参加していく中で，日本の子どもはより背景に注意配分をするようになり，北米の子どもは中心的な対象に注意配分をするようになるという過程が考えられるのではないか。

先に紹介した，Senzaki et al.(2016)は，このことを検討している。日本とカナダの4-6歳児，および，7-9歳児が1人でアニメーションについて叙述したときには，日本とカナダの子どもの間で違いは見られなかったが，親子2人でアニメーションについて話してもらった場合，親の発話においては，日本の親の方がカナダの親よりも背景に言及する数が多かった。逆に，中心的対象である魚に言及する数は，カナダの親の方が日本の親よりも多かった。それでは，親子2人で話す場合の子どもの発話はどうであっただろうか。4-6歳児では，中心的対象である魚に言及する数も，背景に言及する数も，日本の子どもとカナダの子どもの間で，違いは見られなかった。しかし，7-9歳児は，背景についての言及数は日本の7-9歳児の方がカナダの7-9歳児よりも多く，中心的対象である魚に言及する数はカナダの7-9歳児の方が日本の7-9歳児よりも多かった。

自分1人で話すときには文化差は見られないが，親と話すときには親と同様の文化差が見られるという7-9歳児の結果をどのように考えればよいだろうか。これらの結果は，7-9歳の時期になると，自分1人ではまだそれぞれの文化で優位な注意配分のスタイルを獲得しているわけではないが，それぞれの文化で優勢な注意配分の仕方の足場を親が作る下では，日本の子どもはカナダの子どもよりも背景に多くの注意配分をし，カナダの子どもは日本の子どもより中心的な対象に多くの注意配分をするというスタイルを身につけてきていると考えることができる。つまり，親がそれぞれの文化における注意の向け方を先導し，足場が作られた活動に参加する中で，子どももそれぞれの文化における注意の向け方を獲得していっていると考えることができる。

人の認知における特性の役割

特性とは

私たちは，家族，友人，同僚，近所の人，店員など，毎日，様々な他者と関わりながら生活している。それでは，私たちは，他者をどのようにとらえているのだろうか。このことを考えるために，誰でもよいので，よく知っている人を一人だけ思い浮かべ，その人はどんな人かを考えて，その人のことを説明する5つの特徴を挙げてみたとする。

さて，どのような特徴が挙がるだろうか。「優しい」,「明るい」,「賢い」,「クラリネットを吹く」,「突っ込みが激しい」,「背が高い」,「○○大学生」,「男」,「自分の車を持っている」など様々なものが挙がると思うが,「優しい」・「明るい」・「賢い」などの類が多いのではないだろうか。「優しい」・「明るい」・「賢い」などは，その人の比較的持続し一貫した傾向を表すもので，特性と呼ばれるものである。その中で,「優しい」・「明るい」など，その人の生活・生き方に関するもの(興味，関心，動機，価値観，感情のあり方などを含む)は性格と呼ばれ,「賢い」など，身体的あるいは心的な活動をすることができる力・技能は能力と呼ばれる。

ところで，性格や能力などの特性とはどのようなものだろう。「りんご」・「水」・「犬」などの物体・物質や動物は，様々なものがあるとしても実際にそのものを見せることによって示すことができる。「歩く」・「書く」なども実際の動作で示すことができるし,「黄色い」・「でこぼこ」など

もその状態のものを示すことができる。しかし，「優しい」・「賢い」などの特性は直接的に見せることができない。おそらく，「荷物運びを手伝った」・「他人のミスを責めず，その人が自分でカバーしようとするのをサポートした」などの行動を示す人がいたら，その人は「優しい」と思うのだろうし，「文章を論理的に体系立てて書いた」・「感情的になっている人に対して意見するのを控えて，その人が落ち着いて判断できるように状況を設定した」などの行動を示す人がいたら，その人を「賢い」と思うのだろう。つまり，特性というのは，直接見せることができるものではなく，あくまで行動から推測したものなのである。

暗黙の人格理論

私たちは，ある特性とある特性の間には関連性があると暗黙の裡に考えているところがある。たとえば，温かい人は寛大であるとか，頭のよい人は冷たいとか，想像力の豊かな人は計画的ではないなどといったことである。そのような考えは体系だったものではなく，本当にそうなのかはっきりとした根拠がないことも多く，実際にはそうでない場合も多いとも考えられるが，なんとなくそのような関連性があると考えている。また，自分でそのような考えを持っていることを必ずしも意識しているわけではないが，そのような考えをあてはめて，限られた情報に基づいて人物の印象を形成したりする。このように，私たちが科学的な根拠に基づいているわけではなく，日常経験を通して，暗黙の裡に特性と特性の間にどのような関連性があるかなど，人物の特性について抱いている考えを暗黙の人格理論(implicit personality theory)と呼んでいる。

たとえば,「科学的な，寛容な，親切な，愚かな，短気な，まじめな，気むずかしい，抜け目のない，軽薄な，無責任な，誠実な，善良な，勤勉な，支配的な，ユーモアのある」という特性が列挙されていたとして,「温かい」という特性を持つ人は，同時に，これらの特性の中のどのような特性を持つ場合が多いと考えるだろうか。また,「知的な」という特性を持つ人の場合はどうだろうか。

おそらく,「温かい」という特性は,「寛容な」・「親切な」・「善良な」・「ユーモアのある」などの特性と共存していると考える人が多く,「知的な」という特性は,「科学的な」・「勤勉な」・「まじめな」などの特性と共存していると考える人が多いのではないだろうか。どうしてそう考えるのかと言われると，何となくであったり，ある人がこれらの特性を合わせて持っているということぐらいは答えられるが，多くの人々が一般的にそういえるのかと聞かれると，明確な根拠を挙げられるわけではない。このように，私たちは，人物を特性でとらえるとき，ある特性群(A)は互いに関連性が強く，別の特性群(B)はAとは別に関連性が強いであろうという暗黙の人格理論を持っている。これは，人物をどういった次元から認知しているかということでもある。

私たちが，人物をどのような次元で認知しているかということについて，研究によって違いはあるものの，おおよそ，温かさや善良さといった「人柄のよさ」という次元と，知的であることや洞察力があるといった「有能さ」の次元で認知していると考えてよいようである。中でも，人柄のよさの次元，つまり，その人が善い人かどうかというのは，私たちが快適で安全な社会生活を送るうえで最も重要な役割を果たすため，通常最も重視される次元であると考えられるが，何かあることを達成する場面では，その人がそれを達成する能力を持っているかどうかが重要な役割を果たすため，有能さの次元が重視されると考えられる(唐沢, 2017)。

Wojciszke et al.(1998)は，大学生に対して，親切な・正直な・誠実ななど人柄のよさに関する8つの特性語と，先見の明のある・腕利きの・物知りななど有能さに関する8つの特性語，そして人柄のよさとも有能さとも無関係な8つの特性語を挙げ，知らない人が数人いる中で，個人的なことで他人には話していないことを話すのにもっとも好ましい人を選ぶとき，あるプロジェクトで必要な複雑な交渉を公平に行う役割を取ってもらうのにもっとも好ましい人を選ぶとき，それぞれどのような特性を知りたいと思うか，知りたい特性の語をすべて挙げるように求めた。また，上記のように特別の目的はなく，一般的に好ましい人を選ぶとき，どのような特性を知りたいと思うかを尋ねた。

その結果，一般的に好ましい人を選ぶときや，個人的なことで他人には話していないことを話す人を選ぶときは，人柄のよさに関する特性語を選ぶことが有能さに関する特性語を選ぶよりも多かったが，プロジェクトで必要な複雑な交渉を公平に行う役割を取ってもらう人を選ぶときは，有能さに関する特性語を選ぶことが人柄のよさに関する特性語を選ぶことよりも多かった。このように，私たちは，他者を認知するとき，一般的には人柄のよさの次元を重視し，その人が信用できるかどうかという目的があるときもそうなのだが，何かある仕事を達成するという目的があるときは，有能さの次元が重視されるというように，目的に応じて重視する次元を柔軟に変更する面もあるようである。

対応バイアス

先に述べたように，特性というのは，私たちが

その人の行動から推測したものである。それでは，人の行動から特性を推測することにはどのような仕組みが働いているのだろう。

列車の棚に荷物をあげようとしている他人を手伝ってあげる人を見ると，その行動に対応した特性として，その人は親切な人だと思うし，店員が少しもたついていると怒り出す人を見ると横柄な人だと思う。このように，行動からそれに対応する特性を推論することを対応推論という。

人の行動は，その人の特性に影響を受けて生み出されている側面もあるが，状況に影響を受けて生み出されている側面もある。しかし，私たちは，人の行動に影響を与えている状況の要因を十分に考慮することなく，その人の行動の原因を対応する特性に帰属する傾向がある。これを対応バイアス(correspondence bias)と呼ぶ。例えば，列車の棚に荷物をあげている他人を手伝ってあげるという行動をある人がしたとしても，それは上司に命令されているという状況でなされているのであれば，本来ならば，その人が親切な人だからと，特性にその行動の原因を帰属するよりも，上司に命令されたからという状況要因に帰属する方が適切である可能性が高い。しかし，私たちは，その人が上司に命令されているということを十分に知っている時でさえ，そのような状況要因を十分に考慮することなく，荷物を棚に上げることを手伝うという行動から，その人は親切だという対応する特性を推論してしまいがちなのである。

Jones & Harris(1967)は，対応バイアスに関する次のような実験を行っている。研究協力者は，当時の米国民にとって重要な関心事だったキューバのカストロ政権に対する賛成または反対のエッセイを読み，そのエッセイを書いた書き手がカストロ政権に対してどのような態度を持っているかを推測した。エッセイは大学の政治学の授業の答案として書かれたものであるとされ，エッセイが書かれる条件として，書き手が自由に賛成の立場，反対の立場を選べるという自由選択条件と，書き手は教師から賛成の立場または反対の立場を割り当てられて，その立場からエッセイを書いたという選択なし条件が設定された。研究協力者は，書き手が自由選択でエッセイを書いたのか，教師に立場を割り当てられて選択なしでエッセイを書いたのかという情報を知らされた上で，書かれたエッセイを読み，エッセイの書き手のカストロ政権に対する政治的態度を推測した。

その結果，自由選択条件では，カストロ政権に賛成の立場のエッセイを書いた書き手の方が，カストロ政権に反対のエッセイを書いた書き手よりも，カストロ政権に対して賛成の政治的態度を持っていると推測されたのはもちろんだが，選択なし条件の場合も，賛成の立場で書くか反対の立場で書くかを指定されてエッセイが書かれたということを知らされてエッセイを読んだにもかかわらず，自由選択条件よりも差が小さくはなっていたが，研究協力者は，賛成のエッセイを書いた書き手の方が反対のエッセイを書いた書き手よりもカストロ政権に賛成の態度を持っていると推測していた(図5)。

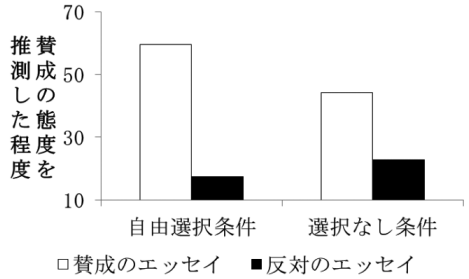

図5. エッセイの書き手に推測した態度　平均値(Jones & Harris(1967)をもとに作成)

対応バイアスを引き起こす情報処理過程

それでは，対応バイアスはどのようにして生じるのだろうか。次に，対応バイアスを引き起こす情報処理過程について考えてみる。

Gilbert et al.(1988)の三段階モデルでは，対人認知における情報処理過程として，行動のカテゴリー化，内的特性の特徴づけ，状況を考慮した修正という3つの段階を想定している。人はまず他者の行動を見たとき，その行動がどのような行動であるかをカテゴリー化する。たとえば，電車の中で席に座っている人が，近くに高齢者が来たところで立ち上がった場合，その人が高齢者に席を譲ろうとしたとカテゴリー化することもあれば，次の駅で降りる準備をしたとカテゴリー化することもある。行動がカテゴリー化されれば，その行動と対応する特性が推測される。座席から立ち上がる行動が席を譲る行動としてカテゴリー化されれば，その人には「親切な」あるいは規範に従っていることから「まじめな」という特性が付与されることになるだろう。そして，最後に，推測された特性が，状況要因の影響を考慮して修正される。たとえば，席を譲った人が，他者に促されて席を譲ったのであれば，「親切な人」という特性を推測することは，取り消されるか，少なくとも割り引かれるであろう。

Gilbert et al.(1988)は，認知的資源が十分に使えないことで，状況を考慮した修正過程が十分に働かなくなることを示している。研究協力者は，ある女性がインタビューに落ち着かなさそうに答えている場面を見て，その女性の不安特性がどの程度かを評定した。インタビューの内容は2種類あり，1つは世界旅行に関する内容で特に不安を喚起するものではない普通のもの，もう1つは性的なことに関することでありインタビューを

受ける人にとっては答えることに不安を感じさせるものだった。研究協力者は，さらに２つの条件に分けられる。１つの条件では研究協力者は，後でインタビューを受けている人の特性について答えてもらうという教示を受けた。つまり，研究協力者はインタビューを受けている人の特性についてのみ考えるという状況で特性を推測することになり，認知的資源を十分に使って特性を推論できた(これを１課題条件と呼ぶこととする)。もう一つの条件の研究協力者は，後で，インタビューを受けている人の特性について答えてもらうといわれるが，また，インタビューの内容がどのようなものであったか答えてもらうともいわれる。つまり，研究協力者は，インタビューの内容を記憶するとともに特性を推測するという２つの課題を行うことになり，特性の推測に十分な認知資源を配分できないことになる(これを２課題条件と呼ぶこととする)。

実験の結果，１課題条件では，不安を喚起する話題(性的な話題)に関するインタビューに答えている人の不安特性は，普通の話題(世界旅行)に関するインタビューに答えている人の不安特性よりも低めに評定された。つまり，落ち着かなさそうにインタビューに答えている人の行動に対応する不安特性を推測しても，インタビューの内容が不安をかきたてる話題であれば，落ち着かなそうな行動は話題のせいであると状況要因によって修正されたのである。しかし，２課題条件では，不安をかきたてる話題のインタビューに答えている人について推測された不安特性は，普通の話題に関するインタビューに答えている人について推測された不安特性と同程度のものだった(図６)。

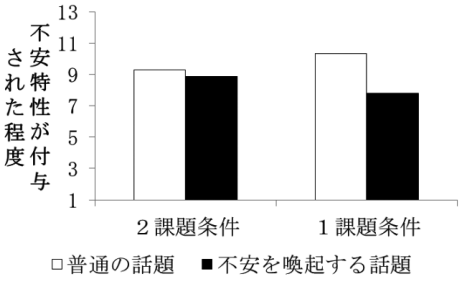

図６. インタビューに答えている人に不安特性を付与した程度平均値（Gilbert et al.（1988）をもとに作成）

つまり，私たちは，認知資源を十分に使えないときは，インタビューの内容がどのようなものかという状況要因による修正をうまく行えず，落ち着かなさそうに答えるという行動から，それに対応する不安特性を推測してしまうという対応バイアスを示したのである。

Gilbert et al.(1988)によると，行動のカテゴリー化と内的特性の特徴づけは，すばやく自動的に生ずる過程であるが，状況を考慮した修正は，より慎重に統制的な情報処理を必要とする過程であり，多くの認知的資源を必要とする。したがって，人物の行動について考える認知資源を十分に使えない時に，状況を考慮した修正の過程が十分に働かなくなり，対応バイアスが生じやすくなると考えられる。

対応バイアスの文化差

対応バイアスは，様々な研究で見られており，頑健な現象であると考えられるが，文化によって，その程度に違いがみられる。一般的に言って，欧米の人々の方が東アジアの人々よりも対応バイアスを示す程度が強い。

Miyamoto & Kitayama(2002)は，日本人大学生と米国人大学生を対象として，対応バイアスの強さを比較した。彼女らは，これまでの対応バイアス研究で用いられた材料としてのエッセイは，説得的な文章で書かれており，立場が割り当てられて自由選択ではないということを知っていたとしても，文章の説得性が手掛かりとなって，それほどその立場で説得的な文章が書けるならば，エッセイの書き手はその立場を支持しているのだろうと研究協力者が考えたために対応バイアスが生じている可能性があると考えた。

そこで，彼女らは，長く説得的なエッセイと短く非説得的なエッセイの２種類を準備し，それぞれのエッセイを読んだときに，エッセイの書き手に対する対応バイアスがどの程度生じるのかを検討した。題材は，死刑制度に賛成か反対かとし，賛成のエッセイを書くか反対のエッセイを書くかは，自由選択ではなく指定されたものとした。つまり，賛成で長く説得的なエッセイ，賛成で短く非説得的なエッセイ，反対で長く説得的なエッセイ，反対で短く非説得的なエッセイの4種類が，立場を指定されて書かれたものとして準備された。これを日米それぞれの大学生に読ませ，エッセイの書き手の死刑制度に対する態度を推測させた。

その結果，長く説得的なエッセイを読んだ場合は，日本の大学生も米国の大学生も，そのエッセイを賛成の立場で書くか反対の立場で書くかが指定されていたことを知っていたにもかかわらず，賛成のエッセイを書いた書き手の方が，反対のエッセイを書いた書き手よりも，死刑制度に賛成である態度を有していると推測しており，対応バイアスが日米の大学生において同程度に見られた。しかし，短く非説得的なエッセイを読んだ場合，米国の大学生は長く説得的なエッセイを読んだ場合と同程度に対応バイアスを示したが，日本の大学生は，長く説得的なエッセイを読んだ時よりも対応バイアスの程度は小さくなっており，米国の大学生が短く説得的ではないエッセイを読んだ時と比較しても，対応バイアスの程度は小さくなっ

ていた(図 7)。

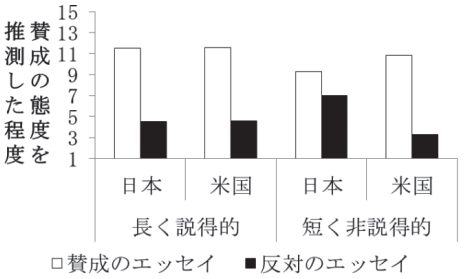

図 7. エッセイの書き手に推測した態度　平均値（Miyamoto & Kitayama（2002）をもとに作成）

このように，対応バイアスは，日本人にも米国人にもみられる現象であるが，その程度は，日本人の方が小さい。このことは，私たちが人の行動の原因をどのように推測するか，人の行動からどの程度その人の特性を推測するのかは，私たちがそれぞれの文化に適応する中で形作られてきたものであることを示唆している。

自発的特性推論

先の Gilbert らの議論からすると，対応バイアスの文化差は，状況を考慮した修正という意図的に統制された情報処理を行う段階の違いから生ずると考えられるが，それより前の段階での自動的な情報処理においても文化差が見られる。

自発的特性推論(spontaneous trait inference)と呼ばれる現象は，他者の行動から，意図せずとも，非意識的，自動的に特性を推論する現象である。自発的特性推論においても，北米の人と日本人との間に違いが見出されている。

Shimizu & Uleman(2021)は，日本の大学生と米国の大学生を対象として，自発的特性推論がなされる程度を調べた。まず，刺激に接触する課題が行われた。この課題では，数十枚のスライド刺激が呈示された。それぞれのスライド刺激には，人物と状況の写真が並んで呈示され，その下に人物の行動文が書かれていた。たとえば，あるスライドでは，A さんという人物の写真と机という状況の写真が並んでおり，その下に「彼女は机を動かす気になりませんでした」という行動文が書かれていた。このような行動文は，「怠惰な」といった特性が推測されやすいことが予備調査によって確認されていたが，行動文はあくまで行動が記述されているだけで，「怠惰な」という特性語は記述されていなかった。このようなスライドが次々と呈示された。

他の課題を行った後，再認課題を行った。再認課題では，研究協力者は，刺激に接触する課題で使用した人物の写真を見せられ，その人物の写真が呈示されたときに特性語が呈示されていたか否か判断するように求められた。特性語の呈示には，実験条件と統制条件の 2 つの条件が設けられた。実験条件では，行動文から推測されやすい特性語が呈示されていたかどうかを判断した。たとえば，刺激に接触する課題で，A さんの写真に「彼女は机を動かす気になりませんでした」という行動文が伴っていたとして，再認課題では A さんの写真に「怠惰な」という特性語が伴って呈示されていたかどうかを判断することが求められた。一方，統制条件では，行動文から推測される可能性は非常に低い特性語が伴っていたかどうかを判断した。たとえば，A さんの写真に「愚かな」という特性語が伴っていたかどうかを判断することが求められた。

もしも，行動文に示された行動から特性が自発的に推論されているのであれば，実験条件では行動から特性が自発的に推論されやすいので，「呈示されていた」と誤再認をしがちであるが，統制条件では行動からそのような特性は推論されにくいので，「呈示されていた」と誤再認をすることは少ないはずである。したがって，統制条件よりも実験条件で「呈示されていた」と誤再認をするスライドの数が多いことが自発的特性推論をする程度の高さとなる。結果は，米国の大学生の方が日本の大学生よりも，統制条件よりも実験条件で「呈示されていた」と誤再認をしたスライドの数が増大する傾向が強かった(図 8)。

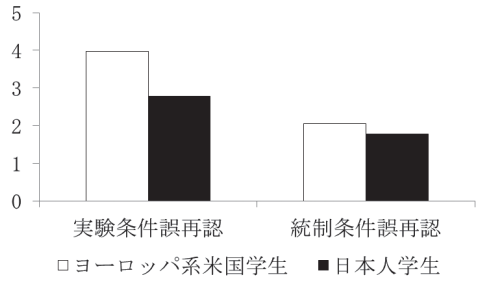

図 8. 誤再認数　平均値（Shimizu & Uleman（2021）をもとに作成）

対応バイアスは，人物の行動からその人の特性をどう考えるのかということが求められており，その行動を状況によるものとするよりその人の特性によるものと考える傾向である。したがって，意識的で統制された推論を含んだ情報処理が行われていると考えられる。一方，自発的特性推論では，行動文を呈示されるが，そこからその人物の特性を判断することは求められておらず，自動的な情報処理過程において特性が推論されていると考えられる。このように，自動的な情報処理過程においても，意識的で統制された情報処理過程を含む推論においても，日本人は，行動から特性を推論する傾向はあるものの，米国人よりもその傾向は弱いと言える。

人物の表象の仕方

推論の場合だけでなく，私たちがある人のことを表象する場合の特性の役割についても文化差が見られる。私たちは，ある人について，「親切な人だ」，「友達を助けてあげた」，「背が高い」，「学生である」など，特性，行動，身体的特徴，社会的属性など，様々な点からその人物のことを表象する。ここで，「親切な人だ」，「友達を助けてあげた」ということを例として検討してみよう。「親切な」というのは形容語であるが，特性に関する語であり，様々な状況を通して，その人のある程度一貫した行動パターンを表している。「友だちを助けてあげた」というのは動詞による表現であるが，その人のある特定の状況における行動を表している。つまり，人物に関する形容語による表現（特性語による表現）は，動詞による表現よりも，抽象度の高い表現であると考えられる。

Maass et al.（2006）は，イタリア人と日本人に対して，知り合いの他者の特徴をどのような語を使って記述するのかを調べた。その結果，イタリア人の方が日本人よりも形容語を使って記述する度合いが高く，日本人の方がイタリア人よりも動詞を使って記述する度合いが高かった。このことから，日本人よりもイタリア人の方が，人物をより抽象性の高い形容語（特性語）で表象している傾向が強く，日本人の方がイタリア人よりも，より具体的な文脈に関連している動詞で人物を表象している傾向が強いと考えられる。

また，記憶の中で，具体的な行動に関する動詞が特性に関する形容語に，特性に関する形容語が具体的な動詞に変容する度合いも検討された。たとえば，「支配的な」というのは特性を表す形容語であるが，「人が自分に従ってくれることを期待する」というのは支配的という特性の具体的な行動を表す動詞による表現である。また，「分析的な」というのは特性を表す形容語であるが，「状況を調べるのに論理に基づく」というのは分析的という特性の具体的な行動を表す動詞による表現である。実験では，ある仕事への応募者の推薦状として，多くの特性形容語や具体的な動詞が含まれている文章を研究協力者は読んだ。推薦状には2つのバージョンがあり，1つのバージョンで特性形容語（たとえば「支配的な」）が使われている場合，もう一つのバージョンではそれに対応する具体的な動詞（「人が自分に従ってくれることを期待する」）が使われていた。いずれのバージョンともに，特性形容語と具体的な動詞が同数含まれていた。

別課題を行った後で，推薦状に書かれていたことを書かれていた通りに再生するように研究協力者は求められた。その結果，イタリアの大学生は，具体的な動詞を誤って特性形容語で再生することが（たとえば，「他の人が従ってくれることを期待する」という動詞を「支配的な」という形容語で誤って再生する），特性形容語を誤って具体的な動詞で再生することよりも多かったのに対して，日本の学生は，逆に，特性形容語を誤って具体的な動詞で再生する方が，具体的な動詞を誤って特性形容語で再生するよりも多かった。これらの結果は，イタリアの人の方が，日本人よりも，他者を抽象的な特性でとらえる傾向があり，日本人の方がイタリア人よりも，他者をより状況と結びついた動詞でとらえる傾向があることによる記憶の変容と考えられる。

このように，他者を記憶の中でどのように表象しているのかという点からみても，日本人は欧米の人と比較して，特性で捉えている傾向は弱いようである。

人を特性で捉えることの文化による違いはなぜ生じるか

以上のように，私たちが人を特性で捉える傾向は一般的に見られるものの，日本人は欧米の人よりもその傾向は弱いようである。それでは，なぜこのような文化間の違いが見られるのだろうか。

私たちが，様々な人と関わりながら生きていく上で，ある人物について，行動が一貫していると捉えること，つまり特性でとらえることは，ある程度有効なことである。たとえば，Aさんが自分の都合はさておいて困っている人を助けていたら，Aさんを親切な人だと特性で捉えて，他の場面でもAさんは同様の行動をするだろうと考えることは理にかなっている。一方で，人の行動は様々な文脈・状況のもとで生じているので，文脈・状況が変わればその人の行動も変わるというのも事実である。対応バイアスのところで述べたように，上司に命令されたり，他人が見ている前では，自分をよく見せようとして困っている人を助けるが，上司に言われなければ，あるいは，他人が見ていなければ，困っている人を助けないということもあり得る。つまり，人の行動は，ある程度どんな文脈・状況でも一貫しているところもあれば，文脈・状況によって変化するところもある。

日本社会では，人々は互いの関係性を重視し，集団内での自分の役割を重視して振る舞うことが多く，他者との関係を壊さないように注意を払いながら自分自身の振る舞い方を決定する傾向が強いと考えられる。そのような社会では，他者がある文脈・状況で示した行動は，その文脈・行動で示されたものであるから，必ずしもその人の特性としてとらえることがふさわしくない場合も多く，どういう対人関係の下でその行動がなされたのか，どういう役割を果たしている集団の中でその行動がなされたのかというように，その行動が

遂行された文脈・状況を考慮することが重要になってくる。そのような社会では，ある程度，人の特性を推測することは理にかなったことではあるが，一方で，あまり特性を推測しすぎず，文脈や状況によってその行動が生じている可能性も考慮することが適応的である。一方，欧米(特に北米)の社会では，それぞれの人が独立した個人であるというのが前提であり，比較的，どのような文脈・状況であっても，その人の動機に基づいた振る舞いがなされると想定されており，一貫した自己というものが想定されている。また，実際，そのように振る舞うことが日本社会よりは強いと考えられる。そのような社会では，ある場面におけるその人の行動からその人の態度や特性を推測することは，日本社会以上に理にかなっているものと考えられる(北山, 1998)。

日本人も欧米の人も，それぞれの社会の中で人々が示す行動パターンの中で生活し，それぞれの社会において適応的な他者認知の仕方を身につけてきたと考えられる。つまり，他者の示す行動からどの程度態度や特性を推測することでうまくいくのか，どの程度文脈や状況を考慮することでうまくいくのかということを，それぞれの社会の中で身につけてきた結果として，人を特性で捉える程度の文化間の違いが生じてきたのではないだろうか。

特性の変化に関する暗黙理論

人の行動から，ある程度安定したその人の特性を推論するかどうかということに関する文化的な違いを検討してきたが，次に，時間軸を延ばして，特性が変化するのかどうかに関する私たちの認知のあり方を考えてみよう。たとえば，あるサークル活動に長期間携わり，様々な課題に取り組んできたという経験によって「粘り強さ」という特性が身についたということが言われることがある。この場合，「粘り強さ」という特性は経験によって身についてくるものと考えられている。一方，あの人の「運動能力」は天性のものだと言うとき，「運動能力」という特性はそれぞれの人に生得的に備わっており，固定的で経験によっては変わりにくいものであると考えられている。このように，私たちは，特性が変わり得るかどうかについて，暗黙の裡にある理論を持っている。

特性に関する暗黙理論として，特性は経験や努力によって伸ばすことができるという考えを増加理論(increment theory)，特性は固定的で変わらないものであるという考えを実体理論(entity theory)と呼び，それぞれの理論を人々がどの程度強く抱いているかということが注目されてきた(Dweck, 1986)。

特性変化に関する暗黙理論の文化による違い. 人々が，特性について，どの程度増加理論的な考えを持っているのか，実体理論的な考え方を持っているのかについても，文化による違いが見られる。Heine et al.(2001)は，日本の大学生と米国の大学生を対象として，いくつかの仮想事例において，持って生まれた能力・才能のせいであると考えるか，努力や練習の成果であると考えるか，両者の貢献度の合計が100%となるよう評定させた。たとえば，「X さんが歴史の授業で，クラスで一番良い成績をとった。」という事例を挙げて，X さんがこのような成績をとったのは，持って生まれた能力のせいか，努力や勉強のせいかを，両者の合計が100%になるよう評定するよう求めた。その結果，日本の大学生の方が米国の大学生より，努力や練習・勉強の成果に帰属する程度が高く，能力・才能に帰属する程度が低かった。つまり，日本の大学生の方が米国の大学生よりも，増加理論的な考えを強く持ち，実体理論的な考えは弱いと言える。

特性に関する暗黙理論の持ち方は，どのような行動に現れるのだろうか。その一つとして，ものごとに成功した時，失敗したときの対処の仕方に違いが見られると考えられる。仮に，増加理論的考え方を強く持っていたとしよう。この場合，あることがうまくできなかったとしても，練習すればうまくできるのではないかという考えにより，もう少し練習してみようとするだろう。一方，実体理論的な考え方が強ければ，うまくできなければ，自分にはそのことに関する才能はないと見切りをつけて，他のことに取り組もうとするのではないだろうか。

Heine et al.(2001)は，このことを実験的に明らかにした。日本の大学生とカナダの大学生が，創造性テストと称する課題(3つのことばに関連することばを考えるという課題が用いられた)に取り組んだ。実際の成績に関わらず，半数の研究協力者は成功経験群とし，平均的な人よりも点数がよいとフィードバックを受けた。残りの半数の人は失敗経験群とし，平均的な人よりも点数が悪いとフィードバックを受けた。フィードバックを受けた後，研究協力者には，次の作業をする前に自由時間が与えられ，研究とは無関係だが，先ほどの課題と同じ種類の課題を自由時間中にしてもよいし，しなくてもよいと告げられ，部屋に残された。その自由時間に，研究協力者が，先に取り組んだ課題と同じ種類の課題にどの程度取り組んだかが調べられた。その結果，失敗経験群では，日本の大学生の方がカナダの大学生より，同じ種類の課題に取り組んだ時間が長かったのに対し，成功経験群ではカナダの大学生の方が日本の大学生よりも同じ種類の課題に取り組んだ時間が長かっ

た(図 9)。この結果は，日本の大学生の方が，失敗しても，もう一度粘り強くその課題をやってみようとしていたと考えられ，カナダの大学生は失敗した場合は諦め，成功した場合は気をよくしてその課題に取り組んでいたのではないかと考えられる。

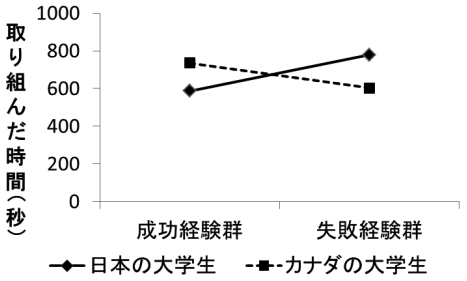

図 9. 成功経験・失敗経験後に同じ種類の課題に取り組んだ時間　平均値（Heine et al.（2001）をもとに作成）

ただし，このような傾向は，教示によっても変わる。努力を促す教示(「課題はできる人とできない人の違いというのはほとんどなく，頑張っていろんなことばを考えていたら，どうにか答えることができる」)が与えられると，米国の大学生は，そのような教示が与えられない時と比較して，失敗経験をしても同じ課題に従事しようとした。一方，日本の大学生はそのような教示を受けても受けなくても，失敗経験後に同じ課題に従事する傾向は変わらなかった。ところが，努力を否定するような教示(「課題はできる人とできない人にはっきり分かれ，できない人は，どんなに頑張っていろんなことばを考えても答えることができない」)を受けると，日本の大学生は，そのような教示を受けない時と比較して，失敗経験後に同じ課題をしようとしなくなるが，米国の大学生は，そのような教示のあるなしに関わらず失敗経験後に従事する時間は変わらなかった(Heine et al., 2001)。つまり，特別な教示が与えられていないデフォールトの状態でも，日本の大学生は努力すればできるようになると言われたときと同じように振る舞っているのに対し，米国の大学生は能力によってできるかできないかがわかれると言われるときと同じように振る舞っているのである。このように，それぞれの文化において優勢な暗黙理論が内面化されて，特別な教示がなければ，日本の大学生は増加理論的な考えに基づき，失敗経験後もそれを克服しようと取り組み続け，米国の大学生は実体理論的な考えに基づき，失敗経験後には，あまりその課題にはこだわらないと考えられる。

特性変化に関する暗黙理論の年齢による違い. 特性変化に関する暗黙理論は，年齢によってどのように変わるのだろうか。また，文化的な違いは年齢によってどのように現れるのだろうか。

Lockhart et al.(2008)は，心理的特性(意地悪，物覚えが悪いなど)，身体機能的特性(走るのが遅い，視力が悪いなど)，不変特性(目の色，空中に浮かべない)が変化可能であると考えるかどうかを，日本と米国の幼児(5-6 歳)，小学生(8-10 歳)，大学生を対象として調べた。

どのような課題を行ったかを，「物覚えが悪い」を例に挙げて説明する。研究協力者に，まず，「A さんは，5 歳の時，クラスで一番物覚えが悪かった。A さんは物覚えがよくなるといいなあと思っていた。10 歳の時も，A さんはクラスで一番物覚えが悪かった。A さんは物覚えがよくなればいいなあと思っていた。A さんは 21 歳になった。」というストーリーを与えた。そして，21 歳の A さんは同い年の人と比べて，物覚えが悪いか(特性は変化しない，1 点と点数化)，同い年の人と同じくらいか(中程度に変化，2 点と点数化)，物覚えがよいか(非常に変化，3 点と点数化)という 3 つの選択肢の中から，研究協力者に自分の考えを選択させた。

その結果，日米ともに，幼児は特性が変化すると考える傾向が高かったが，大学生において，特に心理的特性や身体機能的特性が変化すると考える傾向は，日本の大学生の方がアメリカの大学生よりも高かった(図 10)。

また，この研究では，研究協力者に対して，どうしてそのように考えたのか，その理由も尋ねていた。理由としては，「努力」(一生懸命練習するからなど)，「加齢」(年をとったらよくなるからなど)，「願望」(そうなりたいからなど)が見られた。その中で，「努力」を理由として挙げた割合は年齢とともに増大するが，大学生では，日本の大学生の方が米国の大学生よりも「努力」を理由として挙げることが多かった。

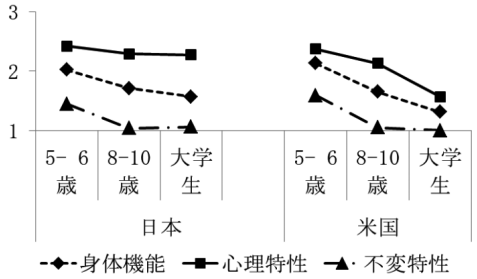

図 10. 特性が変化しうると考える程度　平均値（Lockhart et al.（2008）をもとに作成）

このように，幼児期には特性の変化に関して，大人の目から見れば不変な特性も含めて，全体的に特性が変化すると楽天的に考えており，明確な文化差は見られないが，小学生から大学生の時期にかけて，文化的な違いが見られるようになり，日本人の方が米国人よりも増加理論的に努力によって心理的特性や身体機能的特性が変容可能であると考える傾向が強くなると考えられる。

素朴弁証法

平家物語の始まりは，「祇園精舎の鐘の声，諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色，盛者必衰の理をあらはす。」とあり，日本人には馴染みの深いものである。また，方丈記の始まりは，「ゆく河の流れは絶えずして，しかももとの水にあらず。」とあり，これも馴染みの深いものである。どちらも，ものごとは不変ではなく，変化のあることが当然であるという考えが背景にある。また，「人間万事塞翁が馬」や「禍福は糾える縄の如し」という言い方に現れているように，ものごとのポジティブな面とネガティブな面は隣り合わせである，裏表であるといった考え方も，私たちは違和感なく受け入れている。これは，変化があるのは当然であるという考え方とともに，一見矛盾しているように見えるポジティブな面とネガティブな面も含んでいることに，ものごとの真の姿があるのだという考えを背景としている。このような考え方は，東洋思想の伝統を受け継いでいるのだが，現代社会に生きている私たちにも引き継がれている。現代社会に生きる人々の，変化や矛盾に対する捉え方に，文化的な違いは見られるのだろうか。

Peng & Nisbett(1999)は，欧米の人々の考え方と対比して，東アジアの人々の考え方を素朴弁証法(naïve dialecticism)的であると述べている。西洋の思想における弁証法は，ある命題とそれに対立する命題を統合してより高次の命題を導き出すことを述べたものだが，素朴弁証法とは，矛盾そのものを認め，その中に真実を見出そうとする考え方である。そこには，1)変化の原則(変化と流転の中にものごとの本質を見る)，2)矛盾の原則(すべてのものごとには相互に矛盾するように見えるいくつかの側面が必ず含まれている)，3)包括的関係の原則(世の中の出来事は複雑に絡み合った因果関係の無限の連鎖でありその一部だけを取り出して理解することはできない)という3つの原則が認められる。

矛盾に対する許容

Peng & Nisbett(1999)は様々な実験を通して，東アジアの人々の考え方の特徴を，北米の人々と比較して明らかにしている。たとえば，格言の好みに関する研究では，米国の大学に在学している米国人学生と台湾からの留学生を対象として，「友人には気をつけろ」といった矛盾を含む格言(友人は心を許せる存在なので気を付ける必要はないはずだが，友人に利用されるケースもあることから，このような格言は含蓄を持っている)と，「すべてに反対する人は必ず失敗する」というような特に矛盾を含んでいるわけではない格言をいくつか呈示し，それぞれに対する好みや使用頻度などを尋ねた。その結果，それぞれの文化圏で使われている格言に関して，米国人の学生は，矛盾を含んでいない格言の方を好んだり使用頻度が高かったりしたが，台湾からの留学生は，矛盾を含む格言の方を好んだり使用頻度が高かった。

また，葛藤状態をどのように解決しようとするかについても検討している。たとえば，「Aさん，Bさん，Cさんにはそれぞれ娘がいます。3人は，それぞれ，娘を育てるにあたり，何がしかの価値観を持って育ててきました。さて，娘が成長し，Aさん，Bさん，Cさんの価値観を拒否し始めました。」という葛藤状況を呈示し，どうなると思うか，3人はどうすべきだと思うかを米国の大学に通う米国人学生と中国人学生に質問した。回答は弁証法的な回答と非弁証法的な回答に分類された。弁証法的な回答とは，「親も娘も互いを理解することに失敗している」などのように，問題の原因が両者にあるとし，両者の立場とも考慮しようとするものである。また，非弁証法的回答とは，「親は娘が自分の価値観を持つ権利を認めるべきだ」など，どちらか一方に非があるとする回答である。その結果，弁証法的回答の割合は，中国人学生が72％であったのに対し，米国人学生は26％であり，中国人学生の方が高かった。別の葛藤状況(大学での課題の多さが学ぶ喜びを奪っているという学生の不満)への回答でも同様の傾向が見られた。

変化を当然とみなす考え方

以上の研究結果は，いずれも東アジアの人の方が北米の人よりも矛盾した側面を受容する傾向が高いことを示している。それでは，変化することを当然とみなす考え方は，どのような研究で明らかにされているのだろうか。

Ji et al.(2001)は，様々な事象について，それがその後変化するのかどうかの予測を求める質問を行った。たとえば，「ルシアとジェフは同じ大学の4年生です。2人は2年間付き合っています。2人は，卒業した後，別れてしまうと思いますか？」という質問に対して，「別れる(付き合っていたのが変化する)」確率を0％～100％で答えさせた。チャンピオンが次の大会で敗れると思うかなど，同様の質問が4種類あるのだが，いずれの質問でも中国の大学生の方が米国の大学生よりも，変化する確率を高めに予測していた。

また，世界経済の成長率について，第1の時点から，2年おきに，第2の時点，第3の時点を呈示し，その後，第4の時点，第5の時点で成長率がどのようになるのか予測する課題も行った。第1の時点から第3の時点にかけて，成長率が増大

するパターンと成長率が減少するパターンを設けて，その後の予測を求めた。その結果，米国の大学生は成長率が増大するパターンではそのまま成長率が増大する（折れ線グラフにするとそのまま折れ線グラフが上昇の傾きを維持する），成長率が減少するパターンではそのまま成長率が減少する（折れ線グラフにするとそのまま折れ線グラフが下降の傾きを維持する）と予測したが，中国の大学生は，上昇パターンでは成長率が頭打ちとなり，それ以上は上昇しないと予測し，下降パターンでは成長率が下げ止まりとなり，それ以上は下がらないと考える傾向が見られた。つまり，米国の大学生が，増大・減少傾向がそのまま続くと予測するのに対して，中国の学生は，増大・減少傾向がいつまでも続くわけではないと考えていることが示された（Ji et al., 2001）。

感情に対する考え方

素朴弁証法的な考え方は，感情に対する向き合い方にも表れているのだろうか。たとえば，「勝って兜の緒を締めよ」というように，成功しても慢心することなく，用心深く事に当たるようにという考え方を私たちはよく聞く。ここには，成功しても大喜びするだけでなく，その感情を制御することが望ましいという考え方が背景にあると考えられる。このように，成功したときの感情に対して，私たちはどのように向き合っているのだろうか。

Miyamoto & Ma（2011）は，ヨーロッパ系の米国人大学生と，米国の大学に東アジアから留学している大学生に対して，何かある重要なことに個人として成功したときに感じる感情を想起させ，その時に感じるポジティブな感情をどの程度維持しようとするか，どの程度しずめようとするかを尋ねた。その結果，ヨーロッパ系の米国人大学生よりも東アジアからの留学生の方が，ポジティブな感情を維持しようとする程度が低く，ポジティブな感情をしずめようとする傾向が高かった（図11）。

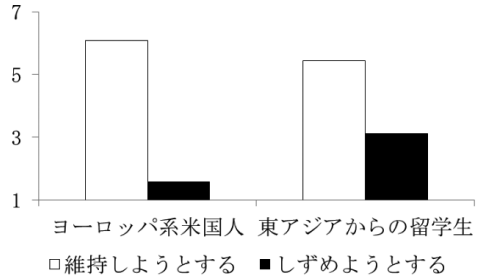

図 11. ポジティブな感情を維持しよう・しずめようとする程度　平均値（Miyamoto & Ma（2011）をもとに作成）

さらに，研究2では，ヨーロッパ系米国人大学生と日本の大学生に対して，何かある重要なことに成功してポジティブな感情を抱いたにもかかわらず，その感情をしずめようとした経験を想起させ，なぜ静めようとしたのかを質問した。その結果，他者の感情を傷つけないようにという理由（たとえば，自分は合格したが，不合格だった友人の手前，大喜びすることは控えたなど）が最も多いというのは日米共通であったが（米国 70.13％，日本 60.64％），「よいことの後には悪いことが起こるから」とか「喜びすぎるとよくないことが起こるから」のように素朴弁証法的な理由を日本の大学生が挙げたのは全体の 23.40％を占めたのに対して，米国の大学生では，わずかに全体の 5.19％であった。したがって，日本の大学生は，素朴弁証法的な考えに基づいて，成功に伴うポジティブな感情を制御しようとする傾向が米国の大学生よりも強いと言える。

一方，試験の成績が平均点以下でネガティブな感情を抱いた学生に対して，感情を制御しようとしたかも調べられている。制御の仕方は2通りあり，達成感や幸福感などのポジティブな感情を持とうとしたか，失望や怒りのようなネガティブな感情を低減させようとしたかどうかを質問した。その結果，ポジティブな感情を持とうとすることも，ネガティブな感情を低減しようとすることも，アジア系の大学生よりも，ヨーロッパ系の米国人大学生の方がより行っていた。つまり，アジア系の大学生は，比較的ネガティブな感情をそのまま受容しているが，ヨーロッパ系の学生は，ネガティブな感情をどうにかしようと感情の制御を試みる傾向が高いと言える（Miyamoto et al., 2014）。

この結果は，アジア系の学生の方が，人生にはポジティブ・ネガティブ両方の側面があることを受け入れているため，ネガティブな感情もあえて制御しようとしないで受容しているのではないかと考えられる。実際に，研究2では，試験に限らずネガティブな経験をしたときのことを想起させ，その時にネガティブな感情をどうにかしようと制御したかどうかを調べるとともに，「何かに失敗した時に気分をあげようとすることは，より一生懸命取り組もうとする気を失うことにつながる」，「何か悪いことが起こった時，気分がよくない状態にとどまることで，問題をよりよく分析することができると思う」など，ネガティブな感情のポジティブな効用をどの程度認めているかという質問を行って，感情に対して素朴弁証法的な考え方をしている程度（ネガティブな感情にもポジティブな側面があると考える程度）も調べた。その結果，ヨーロッパ系の米国人学生より，アジア系の学生の方が，ネガティブな感情の制御をおこなわない傾向があるだけでなく，ネガティブな感情のポジティブな効用を認める傾向にあった。ま

た，ネガティブな感情を何とかしようと制御する傾向の文化差は，ネガティブな感情のポジティブな効用を認める傾向によってもたらされていることが明らかとなった(Miyamoto et al., 2014)。つまり，ネガティブな感情にもポジティブな効用があると考える東アジアの人々の素朴弁証法的な考え方が，ネガティブな感情をあまり制御しようとしない傾向につながっていると言える。

自分に対する認知・感情・評価

自分というものは，誰にとっても関心のある存在であり，自分をどのように捉えるかということは心理学的にも重要な問題である。ここでは，自分というものを認知的にどのように捉えているか，また，自分をよい / 悪いや好き / 嫌いのように，どのように評価しどのような感情を抱いているのかという観点から考えていく。

自己認知

自分をどのように捉えているのかについては，20 答法を用いた研究が多くみられる。20 答法とは，「私は・・・(空欄)・・・」と書かれたものを 20 個準備し，自分は誰か？自分について思い浮かんだことを書いて下さいと教示して空欄を埋めてもらう方法である。調査協力者が自分で思い浮かんだものを自由に書くことができるので，人が自分をどのように捉えているのかを様々な観点から検討できる。

このような方法が可能になるのは，おおよそ小学校中学年以降であるので，それ以降の年齢による違いを見てみると，性格，信念・価値観，態度などの内面的なものによる記述は，中学生，高校生，そして大学生になるにつれて増加し，逆に，所有物，衣服，身体的特徴などの外面的なものによる記述は減少していく(山田 , 1989)。つまり，思春期・青年期という時期に，性格・態度などの内面的な特性で自分を認知する傾向が増大する。

ところで，自己認知のあり方は，文化によって異なるのだろうか。日本の大学生と米国の大学生に対して 20 答法を行った結果を比較すると，米国の大学生の方が日本の大学生よりも性格特性(「自己中心的である」，「社交的である」など)で記述する割合が高く，日本の大学生の方が米国の大学生よりも，身体的特徴(「髪が短い」など)や従事する活動(「アルバイトをしている」など)で記述する割合が高くなった(Cousins,1989; Kanagawa et al., 2001)。つまり，日本の大学生は米国の大学生よりも具体的な行動で自分を認知する傾向が高く，行動をまとめた抽象的な性格特性で自分を認知する傾向が低いということが言える。このことは，先に人物の表象の仕方で述べた，日本人はイタリア人よりも，人物を抽象性の高い特性語で表象している傾向が弱く，具体的な文脈に関連している動詞で表象している傾向が強いこと(Maass et al. , 2006)と一致している。

ただ，日本の大学生が，必ずしも特性で自分を認知する傾向が低いというわけではない。一般的な「自分とは」という問い方ではなく，「家庭では」とか「学校では」のように状況を設定した上で，20 答法を行うと，むしろ，日本の大学生の方が米国の大学生よりも性格特性で記述する割合が高かった(Cousins, 1989)。つまり，日本の大学生は，「学校では，私は勤勉だ」のように，状況が設定されると性格特性で自分のことを記述するのだが，様々な状況を超えて自分のことを「私は勤勉だ」と記述することはあまりしないということである。このことは，状況に応じて自分自身が変わる，自分の違った面が出てくるという捉え方を日本の大学生はする傾向が高いということを示している。

自尊感情

「自分のことを好ましく思いますか？」，「自分はいろいろなことを人並みにはまあまあうまくやれると思いますか？」，このようなことを聞かれたら，どのように思うだろうか。これらは，自分に対してどのような感情を抱いているか，自分をどのように評価しているかということを問う質問である。

自分に対する感情や評価に関しては，自尊感情(self-esteem)という考え方から検討がなされている。自尊感情を調べる方法としてもっともよく使われているのは，Rosenberg が作成した質問項目である(Rosenberg, 1965)。Rosenberg(1965)は，自尊感情を，自分に対する肯定的・否定的態度であるとし，自分に対する肯定的態度には，「とてもよい(very good)」という感情と，「これでよい(good enough)」という感情が含まれるが，自尊感情は「これでよい」という感情であるとしている。「これでよい」という感情とは，他者よりも優れているということではなく，自分の基準に照らしてこれでよいと思う感情であり，あるがままの自分を価値があるものとして尊重している状態のことである。

自分に対する肯定的な態度として，自己愛や自己受容という概念と自尊感情との違いも見ておこう。自己愛(narcissism)とは，他者に対する優越性や有能性の感情，および，それを誇示しようとする傾向，自己中心的傾向のことであり，あくまで自分を基準とした自己受容・自己尊重である自尊感情とは区別される。また，自尊感情は自己受容と類似した概念であると考えられるが，現在の自分を受け入れているだけでなく，自分を尊重し

てはいるが，その不十分さに気づいており，それを克服して成長しようという意志を持っている状態と Rosenberg(1965)は考えている。

Rosenberg は，自尊感情を測定する 10 項目の尺度を作成しており，これは世界中で多くの研究に用いられている。日本語にも翻訳されており(Mimura & Griffiths, 2007)，10 項目の中には，「私は，自分自身にだいたい満足している。」，「時々，自分はまったくダメだと思うことがある。(逆転項目)」，「私にはけっこう長所があると感じている。」，「私には誇れるものが大してないと感じる。(逆転項目)」などの項目が含まれている(逆転項目とは「そう思わない」ほど自尊感情が高いと判断される項目で，逆転項目ではない項目は「そう思う」ほど自尊感情が高いと判断される。通常，10 項目の合計点で自尊感情の高さを示すとされることが多い)。

ある時点での自尊感情の高さを測定しておき，それが後の時点での社会的関係の持ち方や精神的健康とどのような関係にあるかを縦断研究によって検討した研究(欧米の人々を対象としたものが多い)をまとめた分析では，自尊感情の高さは社会的関係の持ち方の質を高めており，精神的健康とも正の関係が見られた。縦断研究ではないが，日本人を対象とした研究でも，自尊感情の高さはソーシャルスキル(他者との関係を開始・維持したり，自分の考えを表明したり，他者の感情などを読み取ったりするスキル)の高さと正の関係(齊藤・岡安 , 2014)，充実感と正の関係や抑うつと負の関係(黒田・有年・桜井 , 2004)が示されている。このように，自尊感情は，私たちが他者と持つ関係の質のよさや，精神的に健康であることと関連性があると思われる。

自尊感情と年齢. 自尊感情の高さは，年齢とともにどの様に変化するのだろうか。欧米を中心とした諸研究の結果も，わが国での研究結果でも，中学生頃の思春期以降，60 歳頃までにかけて，徐々に自尊感情が高くなっていくことは一貫して示されている(荻原 , 2018; Orth et al., 2018; 小塩他 , 2014; Robins et al., 2002)。児童期と比較して思春期に自尊感情が低まるのかどうかについては，低まるという結果もあるが(Ogihara et al., 2016; Robins et al., 2002)，多くの研究をまとめた結果，児童期と思春期で変わらないという結果も報告されており(Orth et al., 2018)，一貫した見解が示されていない。児童期よりも自尊感情が低下するかどうかは明確ではないが，思春期頃は後の時期と比較して，自尊感情が日によって変動しやすいという不安定さも示されており(Meier et al., 2011)，自尊感情の低さと合わせて，この時期の自分に対する感情の持ち方や評価の仕方は注目するべきことがらである。

自尊感情と文化. Rosenberg の尺度のように，質問紙によって意識的な自尊感情を得点化した結果を比較すると，日本人の自尊感情得点は諸外国と比較して低いことが，様々な研究で明らかになっている。たとえば，日本人とヨーロッパ系カナダ人をそれぞれ 1500 人程度調べた結果では，日本人の得点は尺度得点の理論上の中点を中心にかなり得点の低い人からかなり得点の高い人まで正規分布をしているのに対し，ヨーロッパ系カナダ人の尺度得点は，理論上の中点よりも高いところに偏って分布していた(Heine et al., 1999)。

日本人の得点の低さは，北米の人々と比較した場合だけでなく，他のアジアの人々と比較した場合でも見られる。世界の 56 の国と地域のおもに大学生を対象として比較を行った結果では，北米やオーストラリアなどの人々は韓国・台湾などのアジアの人々よりも自尊感情得点が高かったが，日本人の自尊感情得点は，韓国や台湾など他のアジアの人々よりも低い傾向が見られた。また，Rosenberg の自尊感情尺度は，「私は，自分自身にだいたい満足している。」，「時々，自分はまったくダメだと思うことがある。(逆転項目)」のように，自分自身に対する好意を問う質問項目と，「私にはけっこう長所があると感じている。」，「私には誇れるものが大してないと感じる。(逆転項目)」のように，自分が何かをうまくできたり，何かに対して効果的に振る舞えると思うかどうかを問う有能感に関する質問項目が含まれているが，自分に対する好意に関する項目の得点も，有能感に関する項目の得点も，日本人は欧米の人々よりも，また他のアジアの人々よりも得点が低かった(Schmitt & Allik, 2005)。

以上のことから，自尊感情を問う質問が自分にどの程度あてはまるかを回答する調査結果で見ると，日本人の自尊感情は諸外国の人々と比較して低いこと，また，日本人だけでなく諸外国の人も同様の傾向であるが，思春期の人は相対的に自尊感情が低く，以降，60 歳頃まで自尊感情が高くなっていく傾向があることは，頑健な結果のようである。

次に，日本人の自分に対する感情･評価を自尊感情とは異なる視点から検討してみることとする。

ポジティブ・イリュージョン

ポジティブ・イリュージョンとは，1)自分の能力や性格特性を実際よりもポジティブに捉えること，2)自分に生じる出来事を楽観的に捉えること，3)外界に対する自分の統制力を高くとらえることである(Taylar & Brown, 1988)。ここでは，1)と 2)について考えてみる。

自分の能力や性格特性を実際よりもポジティブに捉える傾向とは，たとえば，自分は平均な人よ

りも親切であるとか，社交的であるとか，知的であると考える傾向のことである。測定方法としては，「あなたは，同じ年代の人の平均と比較して『親切である』ということにあてはまると思いますか？」という問いに対して，「全くあてはまらない・あてはまらない・どちらかといえばあてはまらない・同じくらいである・どちらかといえばあてはまる・あてはまる・非常にあてはまる」の7段階の中から該当すると思うものを選んでもらう。『親切である』というところに，『社交的である』や『知的である』などの形容語を入れて同様に答えてもらう。

この問いは，平均との比較なのだから，すべての人が自分を客観的に捉えているのであれば，同じくらいであるというのを中心として，あてはまると答える人もあてはまらないと答える人も同じくらいいるはずである。しかし実際には，「あてはまる」と答える人の方が「あてはまらない」と答える人よりも多い。つまり，多くの人が自分を平均よりも「親切である（社交的である，知的である）」と考えているのである。これがポジティブ・イリュージョンである。

別の方法として，自分，および，自分と同じ年代の平均的な人が，それぞれ，どの程度「親切である」かを答えてもらい，その差を調べるという方法もある。平均的な人よりも自分の方が親切であると答える程度の大きさが，ポジティブ・イリュージョンの強さとみなされる。

このような方法を使って調べると，北米の大学生では，明確にポジティブ・イリュージョンが見られる。一方で，日本の大学生について言うと，「優しい」や「親切である」などの調和性に関する特性や，「まじめだ」などの誠実性に関する特性についてはポジティブ・イリュージョンが見られたが，身体的魅力や社交性，知的能力に関しては，むしろ，平均的な人よりも自分の方をネガティブに捉えるネガティブ・イリュージョンが見られた（Heine & Lehman, 1999; 伊藤 , 1999; 高山 , 2007; 外山・桜井 , 2001）。つまり，日本人は，一般的な人と比較して，自分の方がより肯定的であるとは思っていない特性があると言える。

自分に生じる出来事を楽観的に捉えるかどうかも同様にして調べられている。たとえば，「大きな病気にかかる」のようなネガティブな出来事が，平均的な人よりも自分には起こりにくいのかどうか，「大金を手に入れる」というようなポジティブな出来事が平均的な人よりも自分には起こりやすいのかどうかという認知が調べられている。また，性格や能力の場合と同様に，自分と平均的な人それぞれについて，これらの出来事が起こりそうな程度を答えてもらい，自分の方が平均的な人よりもネガティブな出来事が起こりにくく，ポジティブな出来事が起こりやすいと考えているのかどうかという方法でも調べられている。

結果は，北米の大学生では，一貫して，ポジティブな出来事は自分の方が他の学生よりも生じやすく，ネガティブな出来事は自分の方が他の学生よりも生じにくいと考えており，ポジティブ・イリュージョンが見られた。一方で，日本の大学生は，ネガティブな出来事については，おおむね他の学生よりも自分には生じにくいと考えるというポジティブ・イリュージョンが見られたが，その程度は北米の大学生よりも弱かった。また，ポジティブな出来事については，他の学生よりも生じやすいと考えている出来事も見られたが，生じにくいと考えている出来事も見られ，結果は一貫していなかった。以上のように，生じる出来事を楽観的に捉えるかどうかについても，日本の大学生は北米の大学生よりもポジティブ・イリュージョンは弱いと言える（Heine & Lehman, 1995; 高山 , 2007; 外山・桜井 , 2001）。

非意識レベルでの自分に対する態度

これまで見てきたのは，質問項目に答えるという方法で，意識上レベルでの自分に対する感情・評価を調べた結果である。一方，様々な対象に対しての意識されない肯定的・否定的態度を測定する方法として，潜在連合テスト（IAT: Implicit Association Test）が開発されており，非意識レベルでの自分に対する感情・評価も調べられている。

潜在連合テストは，同じカテゴリーであると暗黙の裡に思っているものを同じグループに分類する反応は，異なるカテゴリーであると暗黙の裡に思っているものを同じグループに分類する反応よりも速くなる性質を用いたものである。たとえば，赤であるダイヤとハートのカードを１つのグループに，黒であるクラブとスペードのカードを別のグループに分類することは，ダイヤとクラブのカードを１つのグループにし，ハートとスペードのカードを別の１つのグループに分類するよりも，速く分類できるはずである。

同様の考えで，たとえば，「自分」と「親友」に対する態度を調べることを考えてみよう。たとえば，ある人が「自分」について肯定的態度を持っていたとして，「あなたは自分にはけっこうたくさんの長所があると思いますか？」と質問しても，謙遜して「それほどでもないです」と答えることはありえるだろう。本人自身も，自分の意識上レベルでは，自分はそれほど長所があるわけではないと思っているかもしれない。ただ，そういう人であっても，非意識レベルでは自分に対して肯定的態度を持っている場合があるかもしれない。この非意識レベルでの態度を測定するため

に，パソコンの画面下中央に，自分の苗字，自分の誕生日，自分の出身地，親友の苗字，親友の誕生日，親友の出身地といった自分や親友に関することばや，嬉しい，愛情，幸せな，恐ろしい，意地の悪い，失敗などの肯定的なことばや否定的なことばをランダムに次々と呈示していく。1つの課題では，パソコン画面の左上に自分・良いという語を呈示し，右上に親友・悪いという語を呈示しておいて，自分に関することば，または，肯定的なことばが画面下中央に呈示されたら左側のキーをできるだけ早く押し，親友に関することば，または，否定的なことばが画面下中央に呈示されたら右側のキーをできるだけ早く押すように指示する（図12パターン1）。別の課題では，画面左上に親友・良いという語を呈示し，右上に自分・悪いという語を呈示しておいて，親友に関することば，または，肯定的なことばが画面下中央に呈示されたら左側のキーをできるだけ早く押し，自分に関することば，または，否定的なことばが画面下中央に呈示されたら右側のキーをできるだけ早く押すように指示する（図12パターン2）。

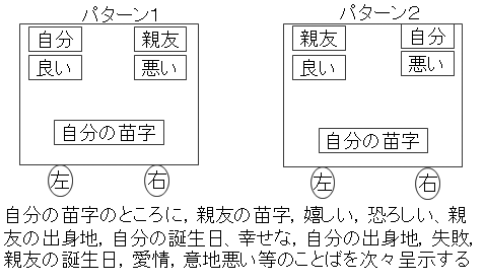

図12. 潜在連合テストで用いられる画面の例

こういった課題を，どちらを左右にするかということや自分／親友と肯定／否定の組み合わせを色々変えて行う。もし自分に対して肯定的態度を持っているとすると，自分に関することばと肯定的なことばが一まとまりで同じキーを押す場合の方が，自分に関することばと否定的なことばが一まとまりで同じキーを押す場合よりも，キーを押すまでの時間が短くなるはずである。

このようなやり方で，「自分」に関係することばと「親友」などの他者に関することば，および，肯定的なことば・否定的なことばを使って，自分に対して非意識レベルで肯定的態度を持っているのか，否定的態度を持っているのかを調べることが可能である。日本の大学生と米国の大学生を対象に，潜在連合テストを使って自分に対する態度を測定した結果，日本の学生も米国の学生と同様に自分に対して肯定的な態度を有しており，特に日米間で違いは見られなかった（Yamaguchi et al., 2007）。このように，非意識レベルでは，日本人も北米の人と変わらず自分を肯定的に捉えているが，意識レベルではそれほど北米の人ほど自分を肯定的に捉えていないという可能性も考えられるのである。

日本人の自分の捉え方

以上の研究を見てみると，日本人は相手との関係に応じて柔軟に自分自身の特徴の捉え方を変化させ，その場に応じた自己認知をしているようである。基本的に自分を肯定的に捉える態度は有しているものの，欧米や他のアジアの人々と比較して，Rosenbergの尺度のように意識上レベルでの質問項目で測定された自尊感情は低く，北米の人と比較してポジティブ・イリュージョンは弱い傾向がある。

これらのことは，東アジア，特に日本では他者との調和が重視され，他者から抜きんでることは控えやすいこと，他者から排除されることは回避したいという思いが強いことが関係していると考えられる。また，自分も含めてものごとには肯定的なことと否定的なことの両面があると考えやすく，変化の可能性を信じてまだまだ成長途上の自分を成長させようとするという特徴も関係しているだろう。これらのことが，自分を肯定的に捉えすぎず抑制を働かせることにつながっており，一概に意識上レベルの質問への回答で測定された自尊感情が低いことが問題であるとも言い切れず，日本人は，自己を肯定的に捉えすぎないようにしつつも，したたかに社会の中で生活していると見た方がよい側面もあるのかもしれない。

ただ，日本人においても意識上レベルの質問への回答で測定された自尊感情が精神的健康やソーシャルスキルの質と関連していることからすると，意識上レベルの質問への回答で測定された自尊感情が低いことは，日本社会においても生き生きと生活していくことの難しさとつながっていることをある程度表しているとも考えられる。自己のあり方を欧米の基準だけでなく日本の文化の中での働きの中で捉えつつも，他の国々と比較して意識上レベルでの質問への回答で測定された自尊感情が低いことを踏まえて，私たちの社会のあり方を見直してみる必要はあると考えられる。

他者感情の認知

私たちが人と関わる時，相手の感情を読み取ろうとする。たとえば，相手が，誰かある人の姿を見かけて笑顔になれば，その人のことが好きなのだと思うだろうし，それまでにこにこしていた人の笑顔が，ある話題になった途端に消えたりすると，その話題には触れたくないのだと思ったりする。また，相手がある人のことをほめているが，その口調が冷めたものであるとすると，本当はそれほど肯定的に思っていないのではないかと思っ

たりする。このように，私たちは他者の表情，行動，姿勢，発話内容，口調などを手掛かりとして，その人の感情をモニターしながら関わっている。相互協調的自己観が強い日本社会では，他者とうまくやっていくために，他者の感情を読むことが重要になってくると考えられる。私たちは，どのような情報を重視して他者の感情を認知しているのだろうか。また，それは文化によって異なるのだろうか。

他者の表情変化の認知

笑顔が消えたり，笑顔が生じたり，怒った表情が生じたり，怒った表情が消えたりなど，表情の変化に私たちはどの程度敏感なのだろうか。そして，表情変化への敏感さは文化によって異なるのだろうか。Ishii et al.(2011)は，日米の大学生を対象として，日本人・米国人の顔を使って，笑顔がだんだんと中立的な顔(特定の感情が特に感じ取れない顔)になっていく動画を見せ，笑顔が消えたと思う時点を報告してもらった(図 13)。また同様のことを悲しい顔についても行い，悲しい顔が消えたと思う時点を報告してもらった。早い時点で笑顔(悲しい顔)が消えたと報告する人ほど，表情の変化(笑顔や悲しい顔が消えること)に敏感であると言える。

図 13. 笑顔から中立顔に変化する動画の例（Ishii et al.（2011）をもとにして作成）

その結果，悲しい表情の消失時点については，日米間で差がなく，どちらの方が早い時点で消失したと報告するわけではなかったが，笑顔の消失については，米国の大学生よりも日本の大学生の方が早い時点で笑顔が消失したと報告した。つまり，日本の大学生の方が米国の大学生よりも，笑顔の消失に敏感であると言える。また，笑顔が消失することへの敏感さ(動画で笑顔が消失すると報告する時点の早さ)が，愛着への不安と関連しているかどうかを検討したところ，全体として，日本の学生の方が米国の学生よりも愛着への不安が高く，愛着への不安が高い学生ほど，笑顔の消失を早く報告する傾向が見られた。つまり，愛着への不安が高いほど，他者の笑顔が消失することに敏感なのである。

Ikeda(2020)は，日本の大学生を対象として，嬉しい顔，悲しい顔，怒った顔，怖がっている顔がだんだんと中立的な表情の顔に変化する動画を呈示し，どの時点でそれぞれの表情が消失したかを報告してもらった。また，中立的な表情の顔から始まり，嬉しい顔，悲しい顔，怒った顔，怖がっている顔にそれぞれ変化する動画を見せ，それぞれの表情が生じたと判断する時点を報告してもらった。そして，報告する時点の早さ(表情の変化への敏感さを表す指標となる)と社会的不安の高さとの関連性を調べた。その結果，社会的不安が高い学生ほど，悲しい，怒った，怖がっているといったネガティブな感情を表す表情の出現を早く報告したが，嬉しいというポジティブな感情を表す表情の出現は社会的不安の高さと関連性が見られなかった。逆に，感情の消失に関しては，社会的不安が高い学生ほど，嬉しいというポジティブな感情を表す表情の消失を早く報告していたが，悲しい，怒った，怖がっているというネガティブな感情を表す表情の消失判断の早さと社会的不安の高さとの間には関連性が見られなかった。つまり，社会的不安が高いほど，ポジティブな表情の消失やネガティブな表情の出現に敏感であると言える。

以上の研究から，他者の表情がネガティブな方向に変化することに対して，日本人は米国人よりも敏感であり，そのことは社会的な不安の高さが関係しているのではないかと考えられる。つまり，日本社会では，他者から否定的評価を受けることを避けたいという思いが強く，特にそういった不安が高い人ほど，他者から否定的評価を受けることを表情から敏感に感じとると言える。

他者感情の認知において参照する手がかり

ところで，他者の感情を認知するとき，私たちは何を手掛かりとしているのだろう。たとえば，図 14 のような表情を示している人がいたら，私たちは，この人が今，どのような感情状態にあると認知するのだろう。喜んでいると思う人もいれば，怒っていると思う人もいるだろう。実は，この顔は上半分は怒っている顔，下半分は笑顔を合成したものである。したがって，目は怒りの表情を，口は喜びの表情を表している。

私たちは，人物の表情において，目の表情や口の表情を手掛かりとしているが，どの情報を重視するか，その度合いは人によって異なっているところがある。他者が話をしている場合も，話の意味内容から感情を認知する側面もあるし，声の高さ・強さ・抑揚といった口調を手掛かりにして感情を認知する側面もある。口調と意味内容のそれぞれの手掛かりを重視する度合いも人によって異なる。表情と口調ではどちらの方に重きを置いて感情の認知を行っているのかということも考えられる。これらの情報に対する重点の置き方には文化間で違いが見られるのか検討してみよう。

図 14. 上半分が怒り，下半分が喜びの表情を合成した顔（Yuki et al.（2007）を参考にして作成）

目と口. 最近ではあまり使われなくなったかもしれないが，電子メールが使われ始めたころ，顔文字を添える場合，日本では，(^_^)などのように目で感情を表すことが多いが，米国では:-)のように口で感情を表すことが多いようであった。表情から感情を認知する時，日本人は米国人よりも目を手掛かりとする度合いが大きく，口を手掛かりとする度合いが小さいのだろうか。

Yuki et al.(2007)は，目の表情と口の表情を操作して，このことを調べた。目がポジティブな表情で口がニュートラルな表情，目がポジティブな表情で口がネガティブな表情のように，目の方が口よりもポジティブな表情の顔，目がニュートラルな表情で口がポジティブな表情，目がネガティブな表情で口がポジティブな表情のように，口の方が目よりもポジティブな表情の顔を準備し，どの程度嬉しいか悲しいかを日米の大学生に評定させた。その結果，目の方が口よりもポジティブな表情の顔に対しては，日本の大学生の方が米国の大学生よりも，より嬉しそうに見えると感情判断を行っていたが，口の方が目よりもポジティブな表情の顔については，米国の大学生の方が日本の大学生よりも，より嬉しそうに見えると感情判断を行っていた。そして，この傾向は，顔文字のようなイラストを使った場合も，人の顔の写真を合成して作成した顔の場合も，同様に見られた。

これらの結果は，日本人学生の方が米国人学生よりも，表情から人の感情を認知する際に，目を重視する程度が高く，口を重視する程度が低いことを表している。

発話の内容と口調. 他者が話をする時，私たちは発話の内容からその人の感情を認知するだけでなく，声の高さや強さ，抑揚などの口調からもその人の感情を認知する。とりわけ，「わざわざ電話しなくてもいいのに」といいながら，声が嬉しそうであったり，「ありがとうございます」という声が怒っていたりというように，発話の内容と口調が伝えるメッセージが異なっている場合，私たちはそれを発した人がどのような感情状態であるのかを読もうとする。私たちが発話の意味内容と口調を重視する度合いにも文化間で違いが見られるのだろうか。

Ishii et al.(2003)は，「ありがたい」・「きれい」などのように快を表す語を快の口調で言う場合と不快の口調で言う場合，「嫌い」・「つらい」などのように不快を表す語を快の口調で言う場合と不快の口調で言う場合の 4 種類の刺激を準備した。日米の大学生が研究に参加し，それぞれ，母語で発話された刺激に対して課題を行った。語の意味内容判断では，研究協力者は，口調は無視して語の意味内容が快であるか不快であるかによって，できるだけ早くボタンを押し分けるように求められた。また，口調判断では，研究協力者は，語の意味内容は無視して口調が快であるか不快であるかによって，できるだけ早くボタンを押し分けるよう求められた。語の意味内容と口調がどちらも快，あるいは，どちらも不快のように，感情の方向が一致している場合は，意味内容と口調に矛盾がないので，判断はしやすく，ボタンはすばやく押せると考えられる。一方で，語の意味内容が快であるのに口調は不快，あるいは，語の意味内容は不快であるのに口調は快のように，意味内容と口調の感情の方向が不一致の場合は，判断が求められていない手掛かりも無視しきれず，その影響を受けて判断がしにくくなり，ボタン押しはその分遅れると考えられる。したがって，語の意味内容と口調の感情の方向が一致する場合よりも不一致の場合にボタン押しがどの程度遅くなるかは，判断を求められていない手掛かりを無視しきれない程度であると考えることができる。

実験の結果は，口調を無視して語の意味内容で判断するよう求められた場合は，日本の大学生の方が米国の大学生よりも，一致の場合よりも不一致の場合の方がボタン押しが遅れる傾向が顕著であった。一方，語の意味内容を無視して口調で判断するよう求められた場合は，米国の大学生の方が日本の大学生よりも，一致の場合よりも不一致の場合の方がボタン押しが遅れる傾向が顕著であった。

以上の結果は，日本の大学生は米国の大学生よりも口調を無視しきれない，米国の大学生は日本の大学生よりも語の意味内容を無視しきれないことを表している。つまり，日本の大学生は，他者の発言からその人の感情を読み取る際に，口調にあらわれている情報を米国の大学生よりも重視しており，発話の内容に表れている情報を重視する程度は米国の大学生よりも弱いことを表している（口調と意味内容のどちらをより重視しているかではなく，日本の大学生と米国の大学生を比較して，どちらの方がより口調を重視している程度が強いか，意味内容を重視している程度が強いかということである）。

顔と声. 顔の表情の目と口それぞれの情報をどの程度重視するか，ことばの意味内容と口調に関する情報をどの程度重視するのかに関する研究を見てきたが，私たちが他者の感情を認知する際には，顔と声のどちらも手掛かりとしている。それ

では，他者感情の認知において，私たちが，顔の表情と声の手掛かりを重視する程度にもやはり文化間で違いが見られるのだろうか。

Tanaka et al.(2010)は，顔の表情の快・不快，声の快・不快を組み合わせた刺激を準備して，日本人とオランダ人を研究協力者として実験を行った。顔の表情が快で声も快，顔の表情が快で声が不快，顔の表情が不快で声が快，顔の表情が不快で声も不快という4種類の刺激を準備し，声を無視して顔の表情で感情を判断すること，顔の表情を無視して声で感情を判断することを研究協力者に対してそれぞれ求めた。顔と声の感情の方向が一致しているものは両者に矛盾がないので感情判断を間違えることは少ないと考えられるが，顔と声の感情の方向が不一致の場合は，無視するようにと求められた手掛かりの影響を受けて，感情判断を間違えることが増えると考えられる。したがって，不一致の場合に正答率が下がるのは，無視するように言われた手掛かりを無視しきれなかった度合いを表している。つまり，その手掛かりを重視している度合いを表している。

実験の結果，声を無視して顔の表情で判断するよう求められた場合は，日本人の方がオランダ人よりも，不一致の場合に正答率が下がる傾向が大きかった。すなわち，日本人の方がオランダ人よりも，感情判断において，声の情報を無視しきれなかった。一方，顔の表情を無視して声で判断するよう求められた場合は，オランダ人の方が日本人よりも，不一致の場合に正答率が下がる傾向が大きかった。すなわち，オランダ人の方が日本人よりも，感情判断において，顔の表情の情報を無視しきれなかった。

以上の結果は，日本人の方がオランダ人よりも，感情判断において，声の情報を重視する程度が高く，顔の表情の情報を重視する程度が低いことを表している(この場合も，顔の表情と声のどちらを重視しているのかではなく，日本人とオランダ人を比較して，どちらの方がより顔の表情を重視し，どちらの方がより声の情報を重視しているのかということである)。

重視される手掛かり情報の文化差．以上の研究結果をまとめると，日本人の方が欧米人よりも，感情判断において，目の表情を重視し口の表情を重視していない，口調を重視しことばの意味内容を重視していない，声を重視し顔の表情を重視していないということになる。これらを総合するとどのようなことが言えるのだろう。

まず第1に，日本人は欧米人よりも意識的にコントロールしにくい情報を重視していると言える。目の表情と口の表情を比較すると，口の表情は明確であり，比較的意識的に作ることが可能であるが，目の表情は，微妙であるとともに，「笑顔だが目が怒っている」などというように，意識的にはコントロールしにくいと考えられる。また，ことばの意味内容は比較的明確なものであり，意識的にどのような表現をしようかコントロールすることが可能なものであるが，口調は，声が震えてしまうということが示すように，意識的にコントロールがしにくいものである。このように考えると，日本人は欧米人より，顔の表情であれ，ことばであれ，意識的にコントロールしにくい手掛かりを重視して感情認知を行う傾向が強いと考えられる。

また，顔の表情と声と両方を用いて他者の感情の認知を行う際，視覚の優位性があるとすれば，顔の表情の方がより中心的な情報であり，声の情報は周辺的な情報であろう。このように考えると，日本人は欧米人よりも，中心的な情報だけでなく，周辺的な情報も判断材料として重視して感情認知を行っていると考えられる。

表示規則

以上のように，他者感情の認知において，日本人は，欧米の人よりも意識的にコントロールしにくい情報を重視したり，周辺的な情報を重視していると考えられるが，どうして，そのような文化間の違いが生じたのだろう。

考えられることとして，日本社会では，欧米社会と比較して，感情をあまり表に出さないという表示規則(display rules)があることが挙げられる。表示規則とは，どのような状況でどのような感情を表出するのが適切であるのかという規範であり，経験を通して獲得されるものとされている。

Safdar et al.(2009)は，幸せ・驚き・恐れ・怒り・悲しみ・軽蔑・嫌悪という7つの感情の表出をどのようにするべきだと考えているかを，日本・米国・カナダの大学生に対して質問した。その際，家族・親友・知人・同級生など様々な人に対して表出をどのようにするべきだと考えているかを，それぞれ質問した。回答の選択肢には，そのまま表出するべき・何ごともないかのように無表情を装うべき・感情を強めて表出するべき・感情を弱めて表出するべき・他の感情を表出して抱いている感情を隠すべき・抱いている感情に他の感情を混ぜて(怒りに少し笑いを入れてなど)表出するべきなどがあった。これらの選択肢を，その感情を表出する度合いに応じて得点化し，その感情表出をするべきと考える程度を表す得点を算出した(感情を強めて表出するべきやそのまま表出するべきは表出するべきと考えている程度が高く，無表情を装うや他の感情を表出して抱いている感情を隠すなどは表出するべきと考えている程度が低いと得点化した)。

分析の結果，日本の大学生は，米国やカナダの

大学生よりも，怒り・軽蔑・嫌悪の感情を表出するべきではないと考えていた。また，日本の大学生は，これらの感情を，家族や親友などの親しい人に対してよりも，知人や同級生などのそれほど親しくない人に対しては表出するべきではないと考える程度がさらに強く，その違いは米国やカナダの大学生よりも大きかった。つまり，日本の大学生は，知り合いではあるがそれほど親しくはない人に対して，親しい人とは明確に区別して，ネガティブな感情を表出するべきではないと考えているのである。このことは，日本人が，普段の生活の中で付き合う可能性が高いが心理的には近いわけではない人に対して，調和を乱すようなネガティブな感情の表出は避けて，それらの人々との関係に波風が立たないように腐心していることを表している。

また，感情の表出ではないが，好みが異なる人に対して自分の好みを表現するべきかどうかに関しても，日本人は米国人よりも，自分の好みを表現することを抑制することが明らかになっている。Wice et al.(2019)は，新しい曲が発表され，主人公はその曲が好きではないとして，主人公の同級生・同僚から，新しく発表された曲をその同級生・同僚自身は好きなのだが君はどう思うかと尋ねられた時，主人公はどのようにすると思うか，どうしてそのようにすると思うのかを小学生・思春期(12 − 13 歳)・大学生の研究協力者に質問した。回答は，表出(主人公は自分の好みを伝える)・中立(好みを表現することを避ける)・偽表出(自分の好みを隠して本心とは異なる好みを伝える)という 3 つのカテゴリーに分類された。

その結果，日本の大学生は米国の大学生よりも，表出が少なく，中立が多かった。小学生の場合は日米の小学生ともに，表出が多く，日本人の場合は，年齢とともに中立が多くなっていく傾向が見られた(図 15)。また，そのように回答した理由を分析したところ，米国の大学生では，「主人公がどのように感じているのかを同僚は聞いているのだから」というように主人公自身の好みを聞かれているのだから本心を表出するべきと思ったという回答が多かったのに対して，日本の大学生は，「自分の好みを伝えることは同僚を否定することになってしまうので，避けるべきだと思った」というように，同僚と好みが異なることを伝えて関係性を悪化させたり，同僚と好みが異なることを伝えることで同僚の面子をつぶすことを避けるようにするべきという回答が多かった。

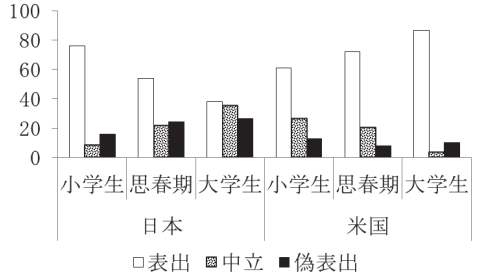

図 15. 相手と異なる自分の好みを主人公は表出すると思うかどうか回答の割合(%)(Wice et al.(2019)をもとに作成)

なお，この研究では，主人公がおばさんの家へ行き，おばさんが作ってくれた食事がおいしくなかったのだが，おばさんに，おいしいかと聞かれたという話を聞かせ，そのときに主人公はどう答えるかという質問も行っている。その結果は，日米間で違いはなく，どちらも年齢とともに表出が減り，偽表出が増えていき，大学生では偽表出が最も多くなっていた。つまり，相手の好意を傷つけないように配慮して表現を調整するという点では，日米間で大きな違いは見られなかったのである。

このように，北米の社会では，それぞれの人の個としての独自の感じ方や考え方を表現することが重視され，相手の感情を傷つけないという配慮はしつつも，独立した個として，自分の感じていること・考えていることを表現することに価値が置かれているのに対し，日本社会では，対人関係に波風を立てたり相手の面子をつぶすことを避ける傾向が大きく，相手と異なる感じ方や考えを表現することを躊躇する傾向が強い。相手と自分の考えが違っていて当然であると思えば，好みの違いを表出することで相手との関係が悪くなったり，相手の面子をつぶすことにはならないはずであるが，日本社会では斉一性の要求が強いためか異なる好みを表出することのリスクを考えてしまうようである。その傾向は，気を許せるわけではないが付き合いのある人々に対して強く，特に，ネガティブな感情の表出という相手との関係を損なうリスクの高い感情表出については，抑制するべきという規範に基づいて行動していると考えられる。そのため，日本人が相手の感情を認知しようとする際，相手の行動は対人関係を維持するためであることを理解し，その背後で相手は本心としてどのように感じ，考えているのかを読み取ろうとして，感情表現を統制しようとしても統制しきれない目の表情や口調などの手掛かりに着目する傾向が強くなっているのではないだろうか。

感情認知における文脈情報

感情認知において，日本人が，中心的な情報だけでなく周辺的な情報も考慮する程度が高い傾向は，ある人の感情認知にまわりの人の表情が影響を与える傾向が強いことにも表れている。Masuda, Ellsworth et al.(2008)は，主人公となる人物を中央に配置し，主人公のまわりに 4 人の人物がいるイラストを呈示した。そして，主人公

が，たとえば喜びの表情を表しているとすると，まわりの４人が主人公と同じ喜びの表情を表しているのか，それとも怒りや悲しみという異なる表情を表しているのかによって，主人公の喜びの程度が異なって認知されるのかどうかを，喜びの程度を10段階で評定することで求めた。主人公が怒りの表情をしている場合，悲しみの表情をしている場合についても，同様に，まわりの４人が主人公と同じ感情を表出している場合と，異なる感情を表出している場合のイラストを呈示し，それぞれの場合における主人公の感情の程度について評定を求めた。

その結果，米国の大学生は，まわりの人物が主人公と同じ感情を表現している場合も異なる感情を表現している場合も，主人公の喜びの程度は同程度であると認知していたが，日本の大学生は，まわりの人が主人公と同じ喜びの感情を表現している方が，まわりの人が怒りや悲しみのように主人公とは異なる感情を表現している場合よりも，主人公の喜びの程度は大きいと認知していた。主人公が怒りや悲しみの感情を表現している場合にも同様の文化差があった。

すなわち，日本の大学生は，まわりの人が主人公と同じ感情を表現している方が，まわりの人が主人公と異なる感情を表現している時よりも，主人公のその感情の程度が強いと認知していたが，米国の大学生では，まわりの人の感情が主人公と同じか否かに関わらず，主人公の感情の強さを同程度に認知していた。

また，主人公の感情を認知する際，実際にまわりの人たちの表情をどの程度見ているのか，主人公の表情をどの程度見ているのかをアイトラッカーを使って検討した結果，日本の大学生の方がヨーロッパ系カナダ人の大学生よりもまわりの人を見ている時間が長かったが，主人公の顔を見る時間は，ヨーロッパ系カナダ人の方が日本人よりも長かった（Masuda et al., 2012）。このように，日本人は，主人公の感情を判断する際にも，まわりの人の表情を参照し，実際にまわりの人の表情によって主人公に対する感情の認知が左右されるのである。

日本人が，北米の人よりも，文脈の情報を考慮するということは，先にも述べたように，様々な対象の認知においてみられる現象であるが，他者感情の認知においても，相手の示す表情という中心的な情報だけでなく，周辺的な声という情報に注意を向ける傾向，相手が示している表情という中心的情報だけではなく，相手を取り巻く人々の表情という周辺的情報にも注意を向ける傾向など，日本人は北米の人に比べて，文脈の情報を考慮する傾向が強いことがわかる。

対人葛藤状況での対処方略

私たちは１人１人がそれぞれの欲求・認知をもって行動をしているので，自分と他者の欲求・認知が相入れないことはしばしば生じる。自分と他者の欲求や認知が相容れず，どうするかすぐには決定が困難である事態を対人葛藤（interpersonal conflict）と言う。たとえば，友人と旅行に行く計画を立てるとき，自分は海に行きたいが，友人は街に行きたいと言っているとか，共有スペースの掃除を自分はよくやっているので次は他の人にやってもらいたいとそれぞれの人が思っているなど，対人葛藤は日常生活で頻繁に生じている。また，富の分配や事故原因の認識など，裁判沙汰になりうる対人葛藤もある。

二重関心モデル

このような対人葛藤の状態の時，私たちはどのように振る舞うのだろうか。あくまで自分の考えを主張したり，相手をやんわり批判したり，相手の主張に同意したり，今回は言うことを聞くが次回は自分の言うことを聞いてくれと言ったり，互いの主張の理由を聞いて話し合ったり，何もせず成り行きに任せたりなど，いろいろな振る舞い方がある。これら，対人葛藤時に使用する様々な方略を，二重関心モデルでは，自分の欲求をどの程度志向するか，他者の欲求をどの程度志向するかによって分類している（Ruble & Thomas, 1976）。

たとえば，「友人と一緒に旅行に行く計画を立てるときに，自分は海に行きたいが，友人は街へ行きたいと言っている」という葛藤状況を例に挙げると，あくまで「海がいいから海へ行こう」と主張するのは，自分の欲求を志向している程度が強く他者（友人）の欲求を志向している程度が弱い方略で，主張／対決方略とされる。また，他者が街がいいと言っているので「街へ行こう」と従うのは，自分の欲求を志向している程度が弱く他者の欲求を志向している程度が強い方略で，服従／譲歩方略とされる。また，海へ行くことと街へ行くことのメリットとデメリットを互いに出して話し合って決定するというのは，自分の欲求への志向も強く他者の欲求への志向も強い方略で，協調／統合方略とされる。また，特に何も主張せず成り行きに任せるのは，自分の欲求への志向も他者の欲求への志向も弱い方略で，回避方略とされる。さらに，自分の欲求への志向も他者の欲求への志向も中程度の妥協方略も想定されている。

同様の考え方は，アサーション（assertion）の考え方でも想定されている。アサーションとは，自分も相手も大切にする自己表現のことで，相手の意見や考えも受け止めて，その場にふさわしい形で自分の意見や考えを率直に伝えることである。

相手の意見や考えを尊重せずに自分の考えを一方的に主張するのは攻撃的な自己表現であり，自分の意見や考えを表現せずに相手を優先して受け身的に行動するのは非主張的な自己表現である(平木，1993)。二重関心モデルで想定されている方略とのおおまかな対応を考えると，攻撃的な自己表現は主張／対決方略にあたり，非主張的な自己表現は服従／譲歩方略および回避方略にあたる。そしてアサーティブな自己表現(アサーション)は協調／統合方略にあたる。

このように，自分の欲求をどの程度志向するか，他者の欲求をどの程度志向するかという観点から対処方略を分類することは，対人葛藤状況において私たちがどういう方略を取るかということを整理するのに有効であると考えられる。

目標と対人葛藤状況での対処方略

それでは，私たちは，どのような時にどのような方略を取る傾向があるのだろうか。大渕(2015)は，対人葛藤状況でどのような方略を取るのかを決定する際，私たちには様々な目標・動機があり，どのような目標・動機があるかが取る方略に影響を与えると考えている。たとえば，相手との関係を良好なものに維持したいという目標(関係目標)，体面を保ちたい・よい印象を持たれたいという目標(同一性目標)，相手に負けたくない・相手を罰したいという目標(支配・敵意目標)，ものごとを公平に処理したい・不当に扱われたくないという目標(公正目標)，経済的利害を守りたいという目標(経済的資源目標)，自分の自由やプライバシーを守りたいという目標(個人的資源目標)などがある。

日本の大学生と米国の大学生を対象として，自分が経験した対人葛藤状況を１つ想起してもらい，その状況でどのような目標・動機を持ったか，どのような対処方略を用いたかを検討した結果，日米ともに，関係目標や経済的資源目標を持った時には，協調／統合方略を取る傾向が見られ，支配・敵意目標を持った時には，主張／対決方略を取る傾向があった。また，日本の大学生では，同一性目標を持った時には，協調／統合方略を取らず服従／譲歩方略および回避方略を取る傾向があった(大渕・福島，1997; Ohbuchi & Tedeschi, 1997)。

ところで，相手との関係を良好なものに維持したいという目標の中には，相手のことをより深く理解したいし自分のこともより理解してもらいたいという関係を深化させる目標もあれば，相手との関係を壊したくないとか相手から嫌われたくないという関係悪化を回避する目標もある。吉田・中津川(2013)は，関係目標のこの２つの側面を区別し，日本の大学生を対象として，対人葛藤状況での対処方略との関係を調べた。その結果，関係深化目標を持つと，協調／統合方略や主張／対決方略を取り，服従／譲歩方略や回避方略は取らない傾向があるのに対して，関係悪化回避目標を持つと，逆に，服従／譲歩方略や回避方略を取り，主張／対決方略は取らない傾向があった。なお，関係悪化回避目標と協調／統合方略との関連性は見られなかった。

以上の結果をまとめると，日本の大学生に関しては，相手との関係を悪化させたくないとか相手に悪い印象を持たれたくないという目標がある場合は，自分の考えを表現しない回避方略や服従／譲歩方略，つまり，自分の欲求を表現しない非主張的自己表現を取りがちになると言える。逆に，同じく相手との関係のよさを目標としていても，互いによりよく知ってよりよく理解したい／されたいという目標がある場合は，相手のことも尊重しつつ自分の考えを表現する協調／統合方略，つまり，アサーティブな自己表現を取りがちになると言える。

日本人の対人葛藤状況での対処方略

北米の人と比較した場合，日本人は自分の欲求を表現しない方略を取る傾向があることも分かっている。Ohbuchi & Takahashi(1994)は，日米の大学生を対象に，自分が経験した対人葛藤を思い出してもらい，その時に実際に取った方略と，取りたいと思った方略を挙げてもらった。その結果，日本の大学生は，特別な解決法を取らなかったという回避方略が実際に取った方略としては50％近くであったのに対して，米国の大学生では20％程度であった。ところが，どのような方略を取りたいと思ったかでは，日本の大学生も回避方略を取りたいと答えた人は20％程度であり，自分の考えを直接的・一方向的に主張したい(主張／対決方略にあたる)という答えが多かった。以上のことから，日本の大学生は，願望としては自分の欲求を強く志向して自己主張をしたいと思っているが，実際には自分の考えは表現せず特に何らかの解決法を取らない自分の欲求を志向する程度の弱い方略を取ることが多いと言える。

それでは，日本の大学生は，対人葛藤状況において，どうして何らかの解決法を取らない回避方略を取りがちなのだろう。Ohbuchi & Takahashi(1994)は，回避方略を取った理由も質問している。理由として挙げられているもので最も多いのは，相手との関係を維持するためというものであった。また，自分にも責任があると思ったからという回答も多かった。以上の結果は，目標と対人葛藤状況での対処方略の関係で紹介した研究とも整合的なものである。相手との関係を悪化させず維持しようとすることは，対人葛藤状況において

自分の考えを主張しない方略を取りがちなものにつながっており，それが日本の大学生の対処方略の特徴となっていると言える。

制御焦点

おいしいレストランには何度も行こうとする，雨に濡れるのは嫌なので傘がなければビルに逃げ込もうとするなど，私たちは一般的に，快(たとえば，おいしい料理)を求め，不快(たとえば，雨に濡れること)を避けようとする。しかしながら，快・不快といっても様々なものがある。たとえば，「よい成績が取れた」・「まわりの人と親しい関係が築けた」というのは望ましいことが獲得できたという快であるが，「落第するような点数ではなかった」・「まわりの人から排除されなかった」というのは望ましくないことを避けることができたという快である。また，「よい成績が取れなかった」・「まわりの人と親しい関係を築けなかった」というのは望ましいことが獲得できなかったという不快であり，「落第する点数をとった」・「まわりの人から排除された」というのは望ましくないことを避けることができなかったという不快である。このように，私たちが求める快には，望ましいことが獲得できること，望ましくないことを避けることができることの２通りのものがあり，私たちが避けたい不快には，望ましいことを獲得できないこと，望ましくないことを避けられないことの２通りのものがあると考えられる。

私たちが目標に到達するために自己制御を行うやり方は制御焦点(regulatory focus)と呼ばれるが，制御焦点には大きく２つの焦点の置き方が区別されている。１つは望ましい状態を獲得できるかどうかに焦点をあてる促進焦点(promotion focus)で，望ましい状態を獲得できることが快であり，望ましい状態を獲得できないことが不快となる。もう１つは望ましくない状態を回避できるかどうかに焦点をあてる予防焦点(prevention focus)で，望ましくない状態を回避できることが快であり，望ましくないことを回避できないことが不快である(Higgins, 1997)。

促進焦点になりやすいか，予防焦点になりやすいかには，理想の自己と義務的自己が関連していると考えられている(Higgins, 1997)。理想とする自己と現実の今の自己との間にずれを感じ，理想とする自己に向けて自分を制御する時は促進焦点的になると考えられる。たとえば，プロスポーツ選手になりたいという理想を抱いているが，今の自分では体力的にも技術的にも及ばないと考えている高校生の場合，プロスポーツ選手にふさわしい体力や技術という望ましいものを得ようとトレーニングに励んだりするだろう。一方，自分は何をするべきか，どのような役割を果たすべきか，何をすることを期待されているかという義務的な自己に向けて自己制御をするとき，義務・役割・期待を達成できないことを回避したいという考えにつながりやすく，予防焦点的になりやすいと考えられる。たとえば，優勝することが当然と期待されており，自分は優勝しなければならないという義務的な自己を強く思うと，優勝できないという望ましくないことを回避したいと思って練習に取り組むことにつながりやすいと考えられる。

制御焦点の置き方は，目標が達成されたとき，および，達成されなかったときに感じる感情の違いをもたらす。たとえば，よい成績をとろうと思っていてよい成績が取れた時，すなわち，促進焦点的に考えていてそれが達成された時は，喜びや誇りといった感情が生じやすいだろう。一方，悪い成績を取りたくないと思っていて悪い成績ではなかった時，すなわち，予防焦点的に考えていてそれが達成された時は，安堵や安心といった感情が生じやすいだろう。また，よい成績をとろうと思っていて取れなかった時，つまり，促進焦点的に考えていてそれが達成されなかった時は，落胆や悲しみの感情が生じやすいだろうし，悪い成績は取りたくないと思っていて取ってしまったとき，つまり，予防焦点的に考えていてそれが達成されなかった時や達成されないと予想される時は，不安や脅威といった感情が生じやすいだろう(Higgins, 1997)。

義務的な自己というのは，まわりの人々や社会から自分に対して期待されている自己であるから，個人的に何かを達成する状況よりも集団において何かを達成する状況の方が，予防焦点的になりやすいのではないかと考えられる。Lee et al., (2000)は次のようなシナリオ実験で，このことを明らかにしている。テニスの個人戦で決勝に進出した場合と，団体戦で決勝に進出しチームを代表して決勝で戦うという場面を用いて，個人での達成場面と集団における達成場面を設定した。そして，それぞれの場面で，「勝てば巨大なトロフィーとチャンピオンシップを獲得する」と促進焦点的に記述される条件と，「負ければ巨大なトロフィーとチャンピオンシップを失う」と予防焦点的に記述される条件が設けられた。そして，決勝戦がどの程度重要であるか，大学生に判断を求めたところ，団体戦の決勝という集団が意識されやすい設定では，予防焦点的な記述の方が促進焦点的な記述の場合よりも重要であると判断された。一方，個人戦の決勝であるという設定によって個人の達成を意識されやすくすると，促進焦点的な記述の方が，予防焦点的な記述の場合よりも重要であると判断された。この結果は，集団において自分が何か行動をするときには，望ましくないこと

を回避できるかどうかという予防焦点的な自己制御が優位に働きやすくなることを示している。

Lee et al.,(2000)は，集団という状況に置かれると予防焦点的になりやすいことを示しているが，そのような状況を長年にわたって経験した結果として，文化により促進焦点と予防焦点がそれぞれどの程度強く働くかが異なることも明らかにされている。東アジアでは，自分自身をまわりとの関係の中で捉え，自己を集団や他者との関係の中での役割としてとらえる傾向が強いため，個人として独自の存在として自己を捉える北米の人よりも，集団の中での自分というものを考えやすく，予防焦点的になりやすいと考えられる。実際，アジア系のカナダ人大学生とヨーロッパ系のカナダ人大学生に対して，「私は，どうすれば望んでいることが達成できるかをよく考える」などの促進焦点的なことが自分にあてはまるかどうか，「私は，どのようにすれば失敗しないでいられるかをよく考える」などの予防焦点的なことが自分にあてはまるかどうかを質問紙によって質問したところ，促進焦点的なことについては，アジア系カナダ人大学生とヨーロッパ系カナダ人大学生の間で，自分にあてはまると思う程度に違いは見られなかったが，予防焦点的なことについては，アジア系カナダ人大学生の方がヨーロッパ系カナダ人大学生よりも，自分にあてはまると答える傾向が高かった(Lockwood et al., 2005)。

また，「目標を達成しようとするときに一番やってはいけないことは，失敗することを心配することである。」，「リスクを取ることは成功のために不可欠である。」のように促進焦点的な方略にどの程度肯定的な態度をとっているか，「何かを達成するためには，慎重であらねばならない。」，「何かを達成するためには，起こり得る障害をすべて知ることが最も重要である。」のように予防焦点的な方略にどの程度肯定的な態度をとっているかを日本の大学生とオーストラリアの大学生(ヨーロッパ系の人が90％以上を占める)に尋ねたところ，日本の大学生はオーストラリアの大学生よりも促進焦点的な方略を肯定する程度が低く，予防焦点的な方略を肯定する程度が高かった(Ouschan et al, 2007)。このように，東アジアの人は，北米の人と比較して，予防焦点的な傾向が強いようである。

制御焦点の置き方の違いは，どのような情報が記憶に残りやすいかということにも表れている。たとえば，「ハイキングをするには最高の天気だった」というのは望ましいことが獲得された状態であり，「大好きな授業が休講だった」というのは望ましい状態が獲得できなかったということで，どちらも促進焦点的な文章である。一方，「交通渋滞に引っかかった」というのは，望ましくない状態を回避できなかったということであり，「テストで思っていたよりよくできた」というのは，望ましくない状態を回避できたということで，どちらも予防焦点的な文章である。これらの文章を多く読ませ，別の課題を行った後，どの程度それらの文章を再生できるかどうか調べたところ，日本の大学生は，予防焦点的な文章の方を促進焦点的な文章よりも多く再生できたが，米国の大学生は促進焦点的な文章の方を予防焦点的な文章よりも多く再生できた(Hamamura et al., 2009)。このように，私たちがどういった情報を記憶にとどめやすいかということについても，制御焦点の違いを反映した文化差が見られるのである。

社会生態学的アプローチ

ここまでのところで，東アジアの人々の心のあり方と欧米の人々の心のあり方の違いを見てきた。それでは，このような心のあり方の違いはどのようにして生じてきたのだろうか。

社会生態学的アプローチでは，人間の心のあり方を，その人たちが生活する社会生態学的環境との相互作用としてとらえ，それぞれの社会生態学的環境に対して適応した結果として文化間での人の心の違いが生じると考えている。社会生態学的環境とは，気候・災害の多さ・病原体の蔓延度などの自然環境，生業形態・都市化・関係流動性(社会的な関係を選択できる自由度の高さで，後に詳しく述べる)などの社会的な環境が含まれる。そして，自然環境が社会的環境に影響を与え，その両者に適応する形で人々の心が形作られるとともに，人々の心が社会的環境および自然環境にも影響を及ぼすという相互の関係が想定されている(竹村・結城 , 2014)。ここでは，生業形態，関係流動性に焦点をあてて，それらがどのようにして文化間の心のあり方の違いに影響を及ぼしていると考えられるのかを見ていこう。

生業形態

伝統的に行われてきたもので考えた場合，農業に従事することは，基本的に土地に縛られており，また，灌漑や農作業など他者と話し合い，共同して作業を行う必要性が高い。特に，米作りの場合はその傾向が強い。日本や中国南部では，歴史的に，農業，特に米作りが盛んであり，このような生業形態は，他者との関係を考慮する相互協調的自己観や，対人関係だけに限らずものごとをまわりとの関係で捉える包括的認知と親和的である。一方，西洋思想の源流である古代ギリシャでは，牧畜や貿易が盛んであり，農業も商業化がなされていた。これらの生業形態は，他者から独立

して自分の考えで営むことが可能であり，そのことは，相互独立的自己観や，対象そのものの特性を捉えようとする分析的思考と親和的である。以上のような生業形態の違いが，相互協調的自己観と相互独立的自己観，包括的認知と分析認知といった現在の東アジアと欧米の人々の心のあり方の違いの源流になっている可能性がある(Nisbett, 2003)。ここでは，農業(特に米作り)という生業形態が相互協調的自己観や包括的認知の形成につながっているのではないかということを考えてみよう。

トルコにおける農業従事者と牧畜従事者. Uskul et al.(2008)は，トルコの黒海沿岸東部に住む，農業(茶畑)に従事している人々，牧畜に従事している人々，漁業に従事している人々を対象として生業形態と包括的認知・分析的認知の関係を調べている。この地域の人々を対象としているのは，言語・宗教など様々な文化的要因が比較的同じという条件を満たし，生業形態が異なる人々を対象とした研究を行いやすいからである。

先に述べた枠の中の線テストを実施したところ，相対判断での正答からのずれの大きさは，牧畜従事者が農業従事者や漁業従事者よりも大きかった。一方，絶対判断での正答からのずれの大きさは，農業従事者や漁業従事者が牧畜従事者よりも大きかった。

また，3つ組課題も行われた。3つ組課題とは標準刺激としてある対象(例えば手袋)を呈示し，2つの選択刺激の中から，標準刺激と一緒になるものを選択してもらう課題であるが，2つの選択刺激のうち1つは標準刺激と同じ分類カテゴリーの対象(手袋の場合はマフラーで，衣類という分類カテゴリーでまとめられる)，もう1つの選択刺激は標準刺激と機能的に関連する対象(手袋の場合は手である。手に手袋をはめるという機能的関係があり，関係性に基づいてまとめられる)になるようにしている。これまでの研究で，東アジアの人の方が北米の人よりも機能的に関連する対象を選択する傾向が強いことが明らかになっており(Ji et al., 2004)，3つ組課題において機能的に関連する対象を選択することは包括的認知の1つの指標，同じ分類カテゴリーの対象を選ぶことは分析的認知の1つの指標と考えられている。実験の結果，農業従事者と漁業従事者は牧畜従事者よりも機能的に関連する対象を選ぶ傾向が強かった。

これらの結果は，農業従事者と漁業従事者が牧畜従事者よりも包括的認知を示す傾向が強いことを示している。

中国における米作地域と小麦作地域. また，Talhelm et al.(2014)は，中国の米作地域出身の学生と小麦作地域出身の学生における包括的認知・分析的認知や相互協調的自己観・相互独立的自己観の程度を調べている。

中国では，おおよそ，揚子江よりも北は小麦作が多く，南は米作が多い。一般的に，米作りの方が小麦作りよりも灌漑の必要性や投下する労働力の多さから，他者と協力する必要性が高い。このことから，米作地域出身の学生の方が小麦作地域出身の学生よりも包括的認知や相互協調的自己観を示す傾向が強いことが予想される。

包括的認知・分析認知の傾向を検討する課題として行われた3つ組課題の結果は，予想された通り，米作が盛んな地域出身の学生の方が，標準刺激と機能的な関係を持つ対象を選択する傾向が高かった。

また，彼らは，友人たちと自分との関係を円で表現してもらい，自分を表現する円として描かれたものと友人たちを表現する円として描かれたものの相対的な大きさを検討する課題も行った。これまでの研究で，日本の学生は欧米の学生よりも，友人たちの円の大きさに対する自分の円の大きさの割合が小さくなる(日本の学生では，自分の円と友人たちの円の大きさは変わらないが，欧米の学生は，自分の円を友人たちの円よりも大きく描く)ことがわかっている(Kitayama et al., 2009)。したがって，相互独立的自己観が強いほど，相対的に自分を大きめに表現する傾向があり，相互協調的自己観が強いほど，相対的な自分の円の大きさは小さくなると考えられる。Talhelm et al.(2014)では，米作地域出身の学生の方が，友人たちの円の大きさに対する自分の円の大きさの割合が小さい傾向があった。

以上のことから，米作りが盛んな地域出身の学生の方が包括的認知や相互協調的自己観を示す傾向が強いと考えられる。しかしながら，中国は広大であるから，北と南では主要な農産物だけでなく，気候なども大きく異なっており，米作がどの程度盛んであるかということ以外の要因が上記の結果をもたらしている可能性もある。Talhelm & Dong(2024)は，この問題を解決するために，中国の寧夏で1950年代に新たに開発された米作農場と小麦作農場(2つの農場は56kmしか離れていない)の人々を比較する研究を行った。両農場には，軍人であった人や都市の若者たちが入植したのであるが，どちらの農場に入植するかは入植者の希望で決定されたわけではなく，トップダウン的にどちらの農場に入植するかが無作為に決められたと考えられるため，人々の示す傾向に，米作を行う農場であるか小麦作を行う農場であるか以外の要因が混入しているとは考えにくい。

3つ組課題の結果は，米作農場の人々の方が小麦作農場の人々よりも，機能的に関連する対象を選ぶ傾向が高かった。また，自分と友人たちを円で図示する課題では，友人たちの円の大きさに対

する自分の円の大きさの割合は，両農場の人々の間で違いがあるとは言えなかったが，自分と家族を円で図示する課題では，米作農場の人々の方が家族の円の大きさに対する自分の円の大きさの割合が小さい（自分を小さく描く）傾向があった。

以上の結果は，友人と自分の円での図示ではTalhelm et al.(2014)とは異なる結果であるが，おおむね，米作農場の人々の方が小麦作農場の人々よりも包括的認知・相互協調的自己観の傾向を示していると言え，他の要因ではなく，米作りという生業形態が包括的認知・相互協調的自己の傾向を強める方向に働いていると考えられる。

日本における農業従事者の多い地域. Talhelm et al.(2014)が対象としたのは，米作地域および小麦作地域出身の学生であるから，必ずしも農業（特に米作）に従事している人が包括的認知や相互協調的自己観が強いというわけではなく，その地域で生活することがそれらの傾向を高めているのではないだろうか。Uchida et al.(2018)は，西日本の農業地域（多くは米作），漁業地域，それ以外の地域からサンプリングされた408集落の人々を対象にした調査でこのことを検討した。

個人レベルの分析として，相互協調的自己の1側面である他者からの評価を気にする程度が，農業に従事しているかどうかや，地域の活動（祭り・自治会活動・冠婚葬祭の互助など）にどの程度参加しているのかということと関連しているかどうかが調べられた。また，コミュニティレベルの分析として，研究協力者の住む地域における農業従事者の割合や，研究協力者の住む地域全体での地域の活動への参加の程度が，研究協力者の他者からの評価を気にする程度と関連しているかどうかが調べられた。個人レベルの分析では，研究協力者が農業に従事しているかどうかによる違いを検討しているのであるが，コミュニティレベルの分析では対象者の住む地域が農業従事者の多い地域であるのかどうかによる違いを分析している。農業従事者の多い地域には農業従事者以外にも会社員や公務員など他の職業に従事している人もいるので，コミュニティレベルの分析では，個人の従事している職業ではなく地域全体での職業構成の特徴と他者からの評価を気にする程度との関連性を調べていることになる。

その結果，他者からの評価を気にする程度は，その人が個人レベルで農業に従事していることよりも，その人の住んでいるコミュニティレベルで農業に従事している人の割合が高いことの方が強い関連性を示すことが明らかになった。また，農業に従事している人が多いコミュニティでは，地域の活動への参加の度合いが高く，そのことが他者からの評価を気にする程度の強さと関連していることも明らかになった。

以上のことから，農業（特に米作）という他者との協力を必要とする職業に従事している人が多いコミュニティでは，人々が協同して行う地域の活動多くなり，どのような職業に従事しているかどうかに関わらず，そのような地域で生活する中で，他者からの評価を気にするという相互協調的自己観の1側面が形成されていくのではないかと考えられる。

関係流動性

関係流動性とは，ある人が生活している社会において，対人関係や集団の選択が自由にできる程度のことである。関係流動性が高い社会では，新しく人と出会う機会がたくさんあり，人々は，自分の意志で誰と付き合うかやどの集団に所属して活動するかを選択することができる。また，現在の関係を離れて新しい関係を結ぶことをその人の意志で選択することができる。一方，関係流動性が低い社会では，対人関係や所属集団は，固定的であり，人が自分の意志で新たな関係を結ぶことには困難さが伴う。また，誰と付き合うか，どのような集団に所属するかには様々な制約がある（現在の関係から互いに抜け出しにくく感じていたり，制度上現在の関係を終えて新しい関係に入りにくいなど）（Yuki & Shug, 2012）。

関係流動性の高さをどの程度感じているかは，「彼ら（あなたの周囲にいる人々）には，人々と新しく知り合いになる機会がたくさんある。」，「彼らは，ふだんどんな人たちと付き合うかを，自分の好みで選ぶことができる。」などの質問項目に対してどの程度当てはまるかを答えてもらって調べられている。この質問項目を共通に用いて，世界各国の人々がどの程度自分が生活する社会の関係流動性が高いと感じているかを調べた研究では，日本を含む東アジアの人々は北米に住む人々よりも自分が住む社会の関係流動性が低いと感じていること，また，米作が盛んな国では関係流動性を低く感じられる傾向があることが明らかになっている（Thomson et al., 2018）。

関係流動性と自己開示. それでは，関係流動性は，人々の認知や行動にどのように関連しているのだろう。まず，自己開示について考えてみよう。自己開示とは，自分の考えていること，自分が感じていること，自分が経験したことなど自分に関することを他者にことばで伝えることである。

私たちが他者に自己開示することは，それによって得られる利益もあれば，損失を生じさせる可能性もある。自己開示して自分のことを相手によく知ってもらって親密な関係を深めたり，相手からそういう人なんだと自分に対する評価を高めてもらうことは自己開示のもたらす利益であるし，こういうことを話すということはあなたを信頼し

ているのですよ，あなたとの関係を継続したいと考えているのですよと伝えることになるのも自己開示のもたらす利益である。逆に，相手からそういう人なのだと否定的な評価を受けてしまい，関係が悪化してしまう可能性や，自分にとって不利な情報を悪用されたり，他の人に広められてしまう可能性もあり，そのことは，自己開示のもたらす損失となる。

関係流動性の高い社会，低い社会で，これらの利益と損失を考えてみると，関係流動性の高い社会では，人々と互いに新しい関係を結ぶ機会が多いので，自分のことをアピールしてよい相手との関係を構築していく必要がある。また，自己開示をして相手との関係が悪化しても，別の相手と新たな関係を築ける可能性が高い。したがって，自己開示することの利益は大きく，損失は少ないと考えられる。一方，関係流動性の低い社会では，お互いにどの相手と関係を築くかということに関する選択肢が少ないため，自己開示して自分をアピールすることで得られる利益は小さいと考えられる。また，相手との関係は長期にわたり，その人との関係が悪化すると，他の人と関係を築ける機会が少ないために，孤立したり必要なことができなくなってしまう可能性が高い。したがって，自己開示して関係が悪化することの損失は大きいと考えられる。以上のことから，関係流動性の低い社会よりも関係流動性の高い社会の方が，自己開示をする傾向は高くなると考えられる（竹村・結城，2014）。

以上の考えは，日米の大学生を対象とした調査において支持されている。Schug et al.（2010）は，日米の大学生を対象として，とても恥ずかしかったことやとても心配していることなどを親友に対して話すかどうかを質問し，また，前述の関係流動性に関する質問も行った。その結果，日本の大学生よりも米国の大学生の方が，親友に対して自己開示を行う傾向が高かった。また，日本の大学生よりも米国の大学生の方が，関係流動性も高いと感じていた。さらに，日米ともに，関係流動性を高く感じている学生ほど自己開示をする傾向が高かった。そして，日米の学生間の自己開示の程度の違いは，両国の学生が感じている関係流動性の高さによってもたらされていることが明らかとなった。

関係流動性と拒絶への不安． 他者から拒絶されることへの不安の高さについても，同様の傾向が見られている。前述のように，関係流動性の低い社会では，他者との関係が悪化することは大きな損失となるため，他者から拒絶されることへの不安は，関係流動性の高い社会よりも大きいと考えられる。

Sato et al.（2014）は，日米の大学生を対象として，他者からの拒絶への不安と関係流動性の関連性を明らかにした。他者からの拒絶への不安の大きさは，友達に無理なお願いをするときの不安の高さと，どの程度そのお願いが拒絶される可能性が低いかを掛け合わせることによって調べられた。たとえば，持ち合わせがなく友達に100円借りることはそれほど拒絶される可能性が高いとは思われないが，10万円借りることは拒絶される可能性が高いと思われる。10万円借りるときに不安に思うからといってその人が拒絶への不安が高いとは言い切れないが，100円借りるときにも不安に思う程度が強いとすると，その人は拒絶への不安が高いと言えるだろう。このように，拒絶される可能性の低さ×不安を感じる程度の高さを拒絶への不安の高さの指標としたのである。そして，自分が生活している社会の関係流動性の高さについても質問した。

結果は，日本の大学生の方が米国の大学生よりも拒絶への不安が高く，関係流動性も低く感じていた。そして，関係流動性を低く感じているほど拒絶への不安も高く，日米の大学生間での拒絶への不安の高さの違いは，関係流動性をどの程度低く感じているかということによってもたらされていることが明らかとなった。

関係流動性と成功時の感情． 次に，何かに成功した場合に抱く感情について考えてみよう。たとえば，クラスの中で自分の成績が一番良かった時，あるいは，ある共同での作業を行っていて，自分が一番貢献していることがわかった時，私たちはどのような感情を抱くだろうか。そのような状況では，一方で「誇らしさ」の感情を感じると思われるが，もう一方で「恥ずかしさ」や「きまり悪さ」を感じることもあるのではないかと思われる。

どうしてこのような感情を抱くのかを関係流動性と関連させて考えてみると，関係流動性の高い社会では，自分のよい面を他者にアピールしてよい関係を築くことが重要な適応課題であるので，成功したことを誇らしく感じていることを表出して他者に好印象を持たせることが適応的であるだろう。一方で，関係流動性が低い社会では，他者との関係を悪化させないことが重要な適応課題であるので，成功して他者から妬みなどの否定的な感情を持たれること（「出る杭は打たれる」というのはこのことを表している）を避けるために，人並であるという規範を逸脱してしまった自分に戸惑っていることを表出することは，そのような否定的評価を回避することにつながる。

以上のことから，関係流動性を感じる程度が米国人よりも低い日本人は，成功時に誇りの感情を抱く程度が低く，恥ずかしさの感情を抱く程度が高いこと，そしてそのような日米間の違いは関係

流動性の高さによってもたらされていると考えられる。

前田・結城(2023)は，このことを明らかにした。オンラインアンケートツールを用いて，日本人とアメリカ人に，「職場のパーティーに参加したところ，同僚たちの中で自分が一番素敵な服装をしていると誰かに指摘された。」や「学校の体育の授業で短距離走をしたところ，クラスで一番だった。」という場面を呈示し，その時にどの程度「誇らしさ」や「恥ずかしさ」を感じるかを質問した。また，成功することは人々から称賛されるのか罰せられるのかに関する信念を調べるため，「私の社会の人々は，大きな成功を収めた人を尊敬したり，友人になりたがったりする。(成功賞信念)」,「私の社会では，とても成功している人々は，周囲の人たちからしばしば批判されたり，叩かれたりする。(成功罰信念)」などの質問にも答えてもらった。そして,関係流動性をどのように感じているのかに関する質問にも答えてもらった。

結果は，日本人の方がアメリカ人よりも，成功時に「恥ずかしさ」を感じる程度が高く，「誇らしさ」を感じる程度が低いこと，また，成功罰信念を抱いている程度が高く，成功賞信念を抱いている程度が低いこと，さらに，関係流動性を低く感じていることが明らかとなった。そして，成功時に恥ずかしさを感じることが日本人の方がアメリカ人よりも高いのは，関係流動性の低さ，および，成功罰信念の高さによってもたらされていること，つまり，日本人の方がアメリカ人より関係流動性を感じている程度が低く，関係流動性を感じている程度が低いほど成功罰信念が高く，成功罰信念が高いほど成功時に恥ずかしさを感じる傾向があることが明らかとなった。また，成功時に誇らしさを感じることがアメリカ人の方が日本人よりも高いことは，関係流動性の高さ，および，成功賞信念の高さによってもたらされている傾向も見られた。

関係流動性と相互協調的自己観・相互独立的自己観. 以上のように，関係流動性が高いことは，自分の独自性を表現し，自分が優れていることを肯定的に捉えることにつながっている一方で，関係流動性が低いことは，他者からの評価を気にし，自分の独自性を表現することを抑制したり，自分が優れていることに対して，肯定的ではあるだろうが，人並を外れることに対する他者からの評価を気にして不安になってしまうような両価的な感情を持つことにつながっていると考えられる。つまり，関係流動性の高いことは相互独立的自己観と関連した心のあり方につながり，関係流動性が低いことは相互協調的自己観と関連した心のあり方につながっていると考えられる。

推測された信念・態度

生業形態や関係流動性など，私たちが生活する社会の特徴が異なり，それに適応することで，私たちの心のあり方も異なってくる可能性を論じてきたが，次に，私たちとともにその社会に生活する人々が抱く信念や態度に適応することによる心のあり方について考えてみよう。ただし，ここでは，まわりの人の実際の信念・態度ではなく，まわりの人が抱いていると自分が推測する信念・態度について考えてみる。

たとえば，学業や仕事などで，あることがうまくいったとして，自分としては「こんな成果をあげた」とまわりの人に表現して，その喜びを共有したいと思っていても，まわりの人は自慢話をしていると思うだろうと思って表現を控えるということを例として考えてみよう。

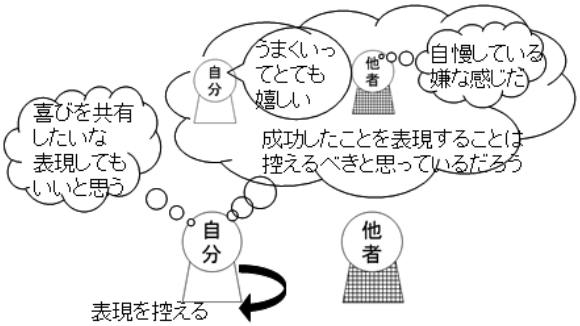

図 16. 他者の信念・態度を推測して行動調節する例

この例は，自分の成功を自己高揚的に発言してもよいという信念・態度を自分は抱いているが，成功を自己高揚的に発言することは抑制するべきだという信念・態度をまわりの人が抱いていると推測していると言える。そして，まわりの人に関してそのような推測をすることで，自分が自己高揚的な発言をするとまわりの人から好ましくない反応(たとえば，自己顕示欲が強くて好きではないという評価・感情)を得てしまうという予測をしている。その結果，自分の信念や態度に基づく行動を抑制して，まわりの人が抱いていると推測した信念やそれに伴う評価・感情に適応した行動(成功の喜びを表現することを控える)を取っていることになる(図 16)。

そもそも，成功しても自己高揚的な発言を抑制するべきだという信念をまわりの人は抱いていると，自分が推測するようになるのはどうしてだろう。自分が自己高揚的な発言をしてまわりの人から否定的な反応を得たという直接経験もあるだろうし，まわりの人が自己高揚的な発言をして他の人から否定的な反応を得てしまうのを見聞きするという代理経験によるものもあるだろうし，まわ

りの人は成功しても自己高揚的な発言をしないということを見聞きするというモデルの観察による学習もあるだろうし，成功しても自己高揚的な発言はしないものだという言説を聞くということもあるだろう。

ここで，まわりの人の行動をモデルとして観察することによる学習について考えてみよう。自分がまわりの人の行動をモデルとして観察し，それによって自分も同様に行動するようになったとして，自分はまわりの人にとっては「まわりの人」の１人なので，自分が自己高揚的な感情表現を抑制することは，まわりの人に対して，「まわりの人は，成功しても自己高揚的な感情表現を抑制している」というモデルを提供していることになる。ということは，それぞれの人が自分は自己高揚的な感情表現をしてもよいと思っていても，そのそれぞれの人がまわりの人は自己高揚的な感情表現をするべきではないと思っていると推測することによって自己高揚的な感情表現を抑制すると，結果としてまわりの人に自己高揚的な感情表現を抑制するというモデルを提供し合うことになり，まわりの人は自己高揚的な感情表現をするべきではないと思っているのだという推測に確証を与えることになる。つまり，私たちは，他者の信念を互いに推測してそれに適応して振る舞うことで，循環的に互いの推測を補強し，推測した信念に合う振る舞い方を維持しあうということが生じる可能性がある（図 17）。

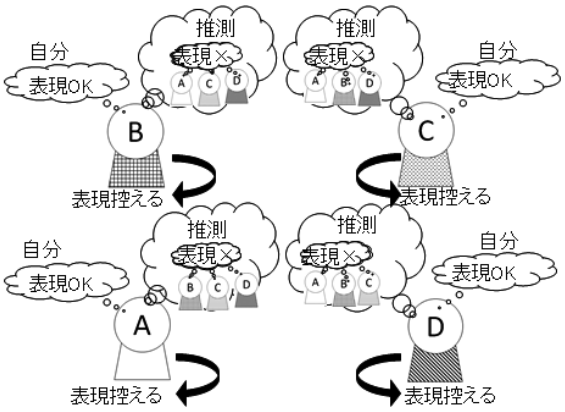

図 17. 他者の信念を互いに推測して振る舞うことで循環的に推測した信念を補強・維持する模式図

このように，ある社会や集団で，それぞれの成員が，自分では規範を受け入れてはいないが，他の成員のほとんどがその規範を受け入れていると信じている状態のことを多元的無知（pluralistic ignorance）と呼んでいる（Allport, 1924; Miller & McFarland, 1987）。ちょうど，裸の王様の話で，それぞれの人は王様が服を着ているとは思っていないのだが，他の人々は王様が服を着ていると思っていると互いに思っているといったような状態である。

多元的無知から人々の行動パターンが維持される仕組みを，社会的ニッチ構築アプローチの考え方に基づいて整理してみよう。私たちは，社会の中で人々がある信念・態度を共有している（例，成功について自己高揚的な感情表現をすることは好ましくない。以下，カッコ内にこの例の場合どうなるかを記載する）であろうという信念を持っているとする。これは，実際に人々がその信念・態度を共有している（成功について自己高揚的な感情表現をすることは好ましくないと人々は実際に思っている）というわけではなく，人々が信念・態度を共有しているという信念が共有されている（成功について自己高揚的な感情表現をすることは好ましくないと人々は思っているだろうとそれぞれの人が思っている）ということである。そして，人々に共有されていると信じている信念・態度から人々の反応を予測し（成功について自己高揚的な感情表現をすると否定的な評価を得てしまうと予測する），それに適応するように自分が採用する行動を決定する（成功について自己高揚的な感情表現をすることを抑制する）。その行動は必ずしも自分の信念・態度（成功について自己高揚的な感情表現をしてもよい）と一致したものではなく，人々から好ましい反応を引き出す，もしくは，好ましくない反応を引き出さないと自分が予測する行動である。しかし，他の成員から見れば，自分も人々の中の一員となるので，自分の行動（成功について自己高揚的な感情表現をすることを抑制する）も，人々に共有されていると成員が考えている信念・態度（成功について自己高揚的な感情表現をすることは好ましくない）を反映したものと見なされる。このように，私たちは互いに他の人々が共有しているであろうと考える信念・態度から他の人々の反応を予測して自分の行動を決定し，互いにそうやって採用された行動は，人々に共有されていると考えている信念・態度を反映しているのであろうと見なすことにより，循環的に，信念・態度，および，それを反映した行動パターンが維持されるのである（橋本 , 2014; Yamagishi, 2011）。

人々が実際に共有している信念・態度と，人々が共有していると推測されている信念・態度が食い違っている例として，相互協調的自己観と相互独立的自己観に対する考え方が挙げられる。橋本（2011）は，約 100 名の大学生に対して，「自分の考えや行動が，他人と違っていても気にならない」，「自分の意見をいつもはっきり言う」など相互独立的自己観に関すること，「人が自分をどう思っているかを気にする」，「自分の所属集団の仲間と意見が対立することを避ける」など相互協調的自己観に関することが，どの程度自分や自分の考え方にあてはまると思うか（現実の自分），理想

の自分ならどのように答えると思うか(理想の自分)，世間一般の人はどのように回答すると思うか(世間一般の人)を答えてもらった。

調査に協力した大学生の平均値を見てみると，相互独立的自己観については，現実の自分よりも理想の自分の方がよりあてはまると回答するだろうと考えている一方で，世間一般の人は現実の自分よりもあてはまらないと回答するだろうと推測していた。一方，相互協調的自己観については，現実の自分よりも理想の自分の方がよりあてはまらないと回答するだろうと考えている一方で，世間一般の人は現実の自分よりもあてはまると回答するだろうと推測していた(図 18)。研究に協力した学生は，研究に協力した他の学生にとっては世間一般の人の 1 人になるのであるから，100 人という多数の人の回答を集めてその平均値を求めた場合，研究に協力した学生が世間一般の人の考えを正確に推測していたのなら，現実の自分の平均値と世間一般の人の回答を推測した回答の平均値はおおよそ一致するはずである。しかし，実際には，現実の自分よりも世間一般の人はより相互協調的であり相互独立的ではないと学生は考えていた。つまり，実際の自分たちが相互協調的であるよりもまわりの人たちは相互協調的であると互いに思っており，実際の自分たちが相互独立的であるよりもまわりの人たちは相互独立的ではないと互いに思っているのである。

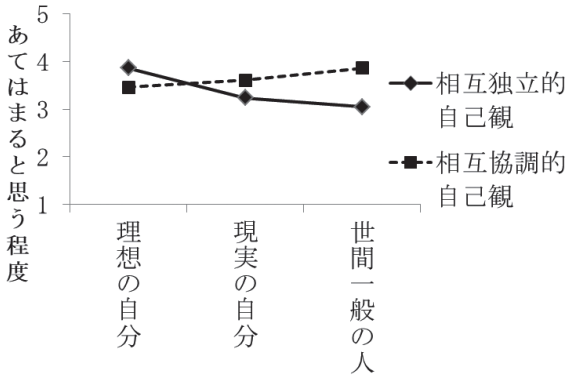

図 18. 相互協調的自己観・相互独立的自己観にあてはまると思う程度　平均値(橋本(2011)をもとに作成)

同様に，松尾・村瀬(2023)は，中学 2 年生，高校 2 年生，大学 3・4 年生を対象として，友人たちとの付き合い方に関して，「喜びや悲しみを分かち合う」，「意見が違うときに納得するまで話し合う」のように相互理解を志向する付き合い方，「できるだけ友人たちと同じように行動する」，「友人たちと意見を合わせようとする」など同調を志向する付き合い方について，実際に自分はそのような付き合い方をしているか(実際の行動)，自分はそのような付き合い方をしたいと思っているか(欲求)，まわりの人はそのような付き合い方をしていると思うか(他者一般の推測)を質問した。

その結果，相互理解を志向する付き合い方は，実際の行動・欲求・他者一般の推測ともに，学年の進行とともに強まっていったが，自分の実際の行動よりも他者一般はそのような付き合い方をしていないと推測していることが，いずれの学年でも見られた。一方，同調を志向する付き合い方は，実際の行動・欲求・他者一般の推測ともに，学年の進行とともに弱まっていったが，自分の実際の行動よりも他者一般はそのような付き合い方をしていると推測していることが，いずれの学年でも見られた。つまり，自分よりもまわりの人の方が同調を志向する付き合い方をしており，相互理解を志向する付き合い方はしていないと互いに考えていることになる。

それでは，他者一般がどのような付き合い方をしているかの推測が，自分の実際の友人との付き合い方に影響を与えているのだろうか。つまり，社会的ニッチ構築アプローチで言うところの，人々に共有されていると信じている信念・態度(今の場合は，他者一般が相互理解を志向した付き合い方していない，同調を志向した付き合い方をしているという信念・態度を共有していると推測している)から，それに適応するように自分の行動を採用しているのだろうか(今の場合は，自分も実際に相互理解を志向した付き合い方をしない，実際に同調を志向した付き合い方をする)。

相互理解を志向した付き合い方，同調を志向した付き合い方それぞれについて，実際の行動，欲求，他者一般の推測の間の関連性を検討した結果，中学生では，他者一般が相互理解的な付き合い方をしていると推測するほど，自分も相互理解的な付き合い方をするというように，他者一般の行動の推測から自分の実際の行動への直接的な影響が見られるとともに，他者一般が相互理解的な付き合い方をしていると推測しているほど，自分も相互理解的な付き合い方をしたいと思う(欲求)傾向が強くなり，それが自分が実際に相互理解的な付き合い方をする傾向につながるという間接的な影響も見られた。高校生，大学生でも同様の傾向が見られたが，他者一般が相互理解的な付き合い方をしているという推測から自分が実際に相互理解的な付き合い方をするという直接的な影響は弱くなっていた。

一方，同調を志向した付き合い方については，中学生の場合は，他者一般が同調的な付き合い方をしていると推測しているほど，自分も同調的な付き合い方をしたいと思う傾向が強くなり，そのことが実際に自分も同調的な付き合い方をすることにつながるという間接的な影響が見られたが，高校生，大学生ではそのような影響は見られなくなった。

このように，中学生の時期には，まわりの人がどのような信念・態度を抱いていると推測することが自分の実際の行動に影響を与えていることが確認されたが，そのような影響は，年齢の増大とともに弱くなるようである。

社会的ニッチ構築アプローチに基づく考え方で，実際に人々が抱いている信念・態度と，人々が抱いていると推測された信念・態度の間に食い違いがあることは，大学生における授業中に質問をすることについても見られるが，他者一般に推測した信念・態度と自分が実際にとる行動との間の関連性は見られない(村瀬，2024)など，推測された人々の信念・態度に基づいて実際に人が行動しているかどうかについては，現時点では明確なことが言えない。松尾・村瀬(2023)が示したように，思春期ではその傾向が強い可能性があるので，年齢を考慮した上で検討を進めて行く必要があると思われる。

おわりに

本論では，包括的認知と分析的認知，相互協調的自己観と相互独立的自己観という視点のもとに，東アジアの人々と欧米の人々の心のあり方について，これまで明らかにされてきたことを紹介し，そのような違いが生じてきたことには，生業形態を基盤として作り上げた社会のシステムや関係流動性が関連していることを論じた。また，自分が生活する社会を構成する他者の心を推測することが，結果的にその社会で一般的とされている振る舞い方を維持する方向に働いている可能性をも論じた。

本論で紹介した様々な心のあり方の文化差は，もちろん，どちらの方がより優れているということではない。また，日本，中国，韓国で違いがあるように，東アジアや欧米の中の各地域でも違いがあるし，日本の人々の中にも様々な人がいるように，それぞれの地域の人々にも個人差は存在する。したがって，「日本人は・・・」，「北米の人は・・・」というようなステレオタイプ的な見方を促進するために文化による違いを述べているわけではない。

文化による違いを知ることの目的は，第１に，自分が育ってきた社会の中で当然であるとされており，自分もそれを暗黙の裡に受け入れてきた心のあり方を一度客観的に見つめ，他の可能性もあることを知って相対化することにある。そして，第２に，そのような心のあり方を生み出してきた社会や対人関係のあり方，そのような心のあり方が社会や対人関係の中でどのような働きをしているのかを知り，自分も社会の一員としてその活動の中に参加していることを知って，生きにくさを感じることにつながっているのであれば，社会や対人関係や自分のあり方を見直すことにある。

今後の課題としては，心のあり方の文化差を生じさせる発達的な基盤を明らかにすることが挙げられる。対象認知において文脈が果たす役割のところで述べたように，対象認知において包括的認知と分析的認知の特徴が立ち現れてくる時期については，いくつかの研究が積み重ねられてきており，現時点では，いつからというはっきりとした時期は明確ではなく，３歳頃から小学生ごろにかけて，徐々に様々な領域で違いが表れるようになっていくことが明らかにされている。しかしながら，包括的認知と分析的認知の様々な特徴が立ち現れてくる発達的な基盤については，まだまだ明らかにされていない。また，相互協調的自己観と相互独立的自己観についても，Wice et al.(2019)の研究などもあるが，そのような文化的自己観の違いを生じさせる発達的な基盤が明らかにされているとはいいがたい。

心の働きの文化的な違いは，ある時期に一度に生じるわけではないのであろうが，ある心の働きが発達的な基盤として生じることで文化的な違いが加速されるということはあるのではないだろうか。このような過程を明らかにすることが今後の課題である。

引用文献

Allport, F. H.(1924). *Social psychology*. Houghton Mifflin.

Bruner, J. S.(1981). Intention in the structure of action and interaction. *Advances in Infancy Research,1,* 41-56.

Cousins, S. D.(1989). Culture and self-perception in Japan and the United States. *Journal of Personality and Social Psychology,56(1)*, 124-131. https://doi.org/10.1037/0022-3514.56.1.124

Duffy, S., Toriyama, R., Itakura, S., & Kitayama, S.(2009). Development of cultural strategies of attention in North American and Japanese children. *Journal of Experimental Child Psychology,102(3)*, 351–359. https://doi.org/10.1016/j.jecp.2008.06.006

Dweck, C. S.(1986). Motivational processes affecting learning. *American Psychologist,41(10)*, 1040-1048. https://doi.org/10.1037/0003-066X.41.10.1040

Gilbert, D. T., Pelham, B. W., & Krull, D. S.(1988). On cognitive busyness: When person perceivers meet persons perceived. *Journal of Personality and Social Psychology,54(5)*, 733–740. https://doi.org/10.1037/0022-3514.54.5.733

Hamamura, T., Meijer, Z., Heine, S. J., Kamaya, K., & Hori, I.(2009). Approach-avoidance motivation and information processing: A cross-cultural analysis.

Personality and Social Psychology Bulletin,35(4), 454-462. https://doi.org/10.1177/0146167208329512

橋本博文(2011). 相互協調性の自己維持メカニズム. *実験社会心理学研究*, 50(2), 182-193. https://doi.org/10.2130/jjesp.50.182

橋本博文(2014).「文化」への適応戦略. 山岸俊男(編著) *文化を実験する：社会行動の文化・制度的基盤* (pp.141-166). 勁草書房.

Heine, S. J., Kitayama, S., Lehman, D. R., Takata, T., Ide, E., Leung, C., & Matsumoto, H.(2001). Divergent consequences of success and failure in Japan and North America: An investigation of self-improving motivations and malleable selves. *Journal of Personality and Social Psychology,81(4)*, 599-615. https://doi.org/10.1037/0022-3514.81.4.599

Heine, S. J., & Lehman, D. R.(1995). Cultural variation in unrealistic optimism: Does the West feel more vulnerable than the East? *Journal of Personality and Social Psychology,68(4)*, 595-607. https://doi.org/10.1037/0022-3514.68.4.595

Heine, S. J., & Lehman, D. R.(1999). Culture, self-discrepancies, and self-satisfaction. *Personality and Social Psychology Bulletin,25(8)*, 915–925. https://doi.org/10.1177/01461672992511001

Heine, S. J., Lehman, D. R., Markus, H. R., & Kitayama, S.(1999). Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review,106(4)*, 766-794. https://doi.org/10.1037/0033-295X.106.4.766

Higgins, E. T.(1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist,52(12)*, 1280–1300. https://doi.org/10.1037/0003-066X.52.12.1280

平木典子(1993). *アサーション・トレーニング：さわやかな〈自己表現〉のために*. 金子書房.

Ikeda, S.(2020). Social anxiety enhances sensitivity to negative transition and eye region of facial expression. *Personality and Individual Differences,163*, 110096. https://doi.org/10.1016/j.paid.2020.110096

Imada, T., Carlson, S. M., & Itakura, S.(2013). East—West cultural differences in context - sensitivity are evident in early childhood. *Developmental Science,16(2)*, 198–208. https://doi.org/10.1111/desc.12016

Ishii, K., Miyamoto, Y., Mayama, K., & Niedenthal, P. M.(2011). When your smile fades away: Cultural differences in sensitivity to the disappearance of smiles. Social *Psychological and Personality Science,2(5)*, 516–522. https://doi.org/10.1177/1948550611399153

Ishii, K., Reyes, J. A., & Kitayama, S.(2003). Spontaneous attention to word content versus emotional tone: Differences among three cultures. *Psychological Science,14(1)*, 39-46. https://doi.org/10.1111/1467-9280.01416

伊藤忠弘(1999). 社会的比較における自己高揚傾向：平均以上効果の検討. *心理学研究, 70(5)*, 367-374. https://doi.org/10.4992/jjpsy.70.367

Ji, L.-J., Nisbett, R. E., & Su, Y.(2001). Culture, change, and prediction. *Psychological Science,12(6)*, 450–456. https://doi.org/10.1111/1467-9280.00384

Ji, L.-J., Zhang, Z., & Nisbett, R. E.(2004). Is it culture or is it language? Examination of language effects in cross-cultural research on categorization. *Journal of Personality and Social Psychology,87(1)*, 57-65. https://doi.org/10.1037/0022-3514.87.1.57

Jones, E. E., & Harris, V. A.(1967). The attribution of attitudes. *Journal of Experimental Social Psychology,3(1)*, 1-24. https://doi.org/10.1016/0022-1031(67)90034-0

Kanagawa, C., Cross, S. E., & Markus, H. R.(2001). "Who am I?" The cultural psychology of the conceptual self. *Personality and Social Psychology Bulletin,27(1)*, 90–103. https://doi.org/10.1177/0146167201271008

唐沢かおり(2017). *なぜ心を読みすぎるのか：みきわめと対人関係の心理学*. 東京大学出版会.

北山忍(1998). *自己と感情：文化心理学による問いかけ*. 共立出版株式会社.

Kitayama, S., Duffy, S., Kawamura, T., & Larsen, J. T.(2003). Perceiving an object and its context in different cultures: A cultural look at New Look. *Psychological Science,14(3)*, 201–206. https://doi.org/10.1111/1467-9280.02432

Kitayama, S., Park, H., Sevincer, A. T., Karasawa, M., & Uskul, A. K.(2009). A cultural task analysis of implicit independence: Comparing North America, Western Europe, and East Asia. *Journal of Personality and Social Psychology,97(2)*, 236–255. https://doi.org/10.1037/a0015999

黒田祐二・有年恵一・桜井 茂男(2004). 大学生の親友関係における関係性高揚と精神的健康との関係：相互協調的－相互独立的自己観を踏まえた検討. *教育心理学研究, 52(1)*, 24-32. https://doi.org/10.5926/jjep1953.52.1_24

Kuwabara, M., & Smith, L. B.(2012). Cross-cultural differences in cognitive development: Attention to relations and objects. *Journal of Experimental Child Psychology,113(1)*, 20–35. https://doi.org/10.1016/j.jecp.2012.04.009

Kuwabara, M., & Smith, L. B.(2016). Cultural differences in visual object recognition in 3-year-old children. *Journal of Experimental Child Psychology,147*, 22–38. https://doi.org/10.1016/j.jecp.2016.02.006

Lee, A. Y., Aaker, J. L., & Gardner, W. L.(2000). The pleasures and pains of distinct self-construals: The role of interdependence in regulatory focus. *Journal of Personality and Social Psychology,78(6)*, 1122–1134. https://doi.org/10.1037/0022-3514.78.6.1122

Lockhart, K. L., Nakashima, N., Inagaki, K., & Keil, F. C.(2008). From ugly duckling to swan? Japanese

and American beliefs about the stability and origins of traits. *Cognitive Development,23(1)*, 155–179. https://doi.org/10.1016/j.cogdev.2007.08.001

Lockwood, P., Marshall, T. C., & Sadler, P.(2005). Promoting success or preventing failure: Cultural differences in motivation by positive and negative role models. *Personality and Social Psychology Bulletin,31(3)*, 379–392. https://doi.org/10.1177/0146167204271598

Maass, A., Karasawa, M., Politi, F., & Suga, S.(2006). Do verbs and adjectives play different roles in different cultures? A cross-linguistic analysis of person representation. *Journal of Personality and Social Psychology,90(5)*, 734-750. https://doi.org/10.1037/0022-3514.90.5.734

前田友吾・結城雅樹(2023). 成功時の誇り・羞恥経験の文化差に対する関係流動性の媒介効果 . *心理学研究 , 94(5)*, 402-412. https://doi.org/10.4992/jjpsy.94.22032

Markus, H. R., & Kitayama, S.(1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review,98(2)*, 224–253. https://doi.org/10.1037/0033-295X.98.2.224

Masuda, T., Ellsworth, P. C., Mesquita, B., Leu, J., Tanida, S., & Van de Veerdonk, E.(2008). Placing the face in context: Cultural differences in the perception of facial emotion. *Journal of Personality and Social Psychology,94(3)*, 365–381. https://doi.org/10.1037/0022-3514.94.3.365

Masuda, T., Gonzalez, R., Kwan, L., & Nisbett, R. E.(2008). Culture and aesthetic preference: Comparing the attention to context of East Asians and Americans. *Personality and Social Psychology Bulletin,34(9)*, 1260–1275. https://doi.org/10.1177/0146167208320555

Masuda, T. & Nisbett, R. E.(2001). Attending holistically vs. analytically: Comparing the context sensitivity of Japanese and Americans. *Journal of Personality and Social Psychology,81(5)*, 922-934. https://doi.org/10.1037/0022-3514.81.5.922

Masuda, T., Wang, H., Ishii, K., & Ito, K.(2012). Do surrounding figures' emotions affect judgment of the target figure's emotion? Comparing the eye-movement patterns of European Canadians, Asian Canadians, Asian international students, and Japanese. *Frontiers in Integrative Neuroscience,6*, Article 72. https://doi.org/10.3389/fnint.2012.00072

増田貴彦・山岸俊男(2010). *文化心理学［上］・［下］：心がつくる文化，文化がつくる心*. 培風館

松尾紀美子・村瀬俊樹(2023). 青年期の友人関係における行動・欲求・他者認知 . *社会文化論集(島根大学法文学部紀要社会文化学科編),19* , 35－46. https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/ja/54760

Meier, L. L., Orth, U., Denissen, J. J.A., & Kühnel, A.(2011). Age differences in instability, contingency, and level of self-esteem across the life span. *Journal of Research in Personality,45(6)*, 604–612. https://doi.org/10.1016/j.jrp.2011.08.008

Miller, D. T., & McFarland, C.(1987). Pluralistic ignorance: When similarity is interpreted as dissimilarity. *Journal of Personality and Social Psychology,53(2)*, 298-305. https://doi.org/10.1037/0022-3514.53.2.298

Mimura, C., & Griffiths, P.(2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of Psychosomatic Research,62(5)*, 589–594. https://doi.org/10.1016/j.jpsychores.2006.11.004

Miyamoto, Y.(2013). Culture and analytic versus holistic cognition: Toward multilevel analyses of cultural influences. *Advances in Experimental Social Psychology,47*, 131-188. https://doi.org/10.1016/B978-0-12-407236-7.00003-6

Miyamoto, Y. & Kitayama S.(2002). Cultural variation in correspondence bias: The critical role of attitude diagnosticity of socially constrained behavior. *Journal of Personality and Social Psychology,83(5)*, 1239-1248. https://doi.org/10.1037/0022-3514.83.5.1239

Miyamoto, Y., & Ma, X.(2011). Dampening or savoring positive emotions: A dialectical cultural script guides emotion regulation. *Emotion,11(6)*, 1346-1357. https://doi.org/10.1037/a0025135

Miyamoto, Y., Ma, X., & Petermann, A. G.(2014). Cultural differences in hedonic emotion regulation after a negative event. *Emotion,14(4)*, 804-815. https://doi.org/10.1037/a0036257

村瀬俊樹(2024). 授業中に質問する人に対する大学生の印象：自分の印象と他の学生に予測する印象の差異 . *人間科学部紀要 ,7*,1 - 13. https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/55102

Nisbett, R. E.(2003). *The Geography of Thought*. The Free Press: New York.(村本由紀子(訳)(2004)　*木を見る西洋人　森を見る東洋人：思考の違いはいかにして生まれるか*. ダイヤモンド社 .)

Nisbett, R. E., Peng, K., Choi, I., & Norenzayan, A.(2001). Culture and systems of thought: Holistic versus analytic cognition. *Psychological Review,108(2)*, 291-310. https://doi.org/10.1037/0033-295X.108.2.291

荻原祐二(2018)日本における自尊心の発達的変化：中学生から高齢者における自己好意の年齢差の検討. *対人社会心理学研究, 18*, 133-143. https://doi.org/10.18910/70551

Ogihara, Y., Uchida, Y., & Kusumi, T.(2016). Losing confidence over time: Temporal changes in self-esteem among older children and early adolescents in Japan, 1999-2006. *Sage Open,6(3)*. https://doi.org/10.1177/2158244016666606

大渕憲一(2015). *紛争と葛藤の心理学：人はなぜ争い，どう和解するのか*. サイエンス社 .

大渕憲一・福島治(1997). 葛藤解決における多目標－その規定因と方略選択に対する効果. *心理学研究, 68(3)*,155-162. https://doi.org/10.4992/jjpsy.68.155

Ohbuchi, K., & Takahashi, Y.(1994). Cultural styles of conflict management in Japanese and Americans: Passivity, covertness, and effectiveness of strategies. *Journal of Applied Social Psychology,24(15)*, 1345-1366. https://doi.org/10.1111/j.1559-1816.1994.tb01553.x

Ohbuchi, K., & Tedeschi, J. T.(1997). Multiple goals and tactical behaviors in social conflicts. *Journal of Applied Social Psychology,27(24)*, 2177-2199. https://doi.org/10.1111/j.1559-1816.1997.tb01647.x

Orth, Erol, & Luciano(2018). Development of Self-Esteem From Age 4 to 94 Years: A Meta-Analysis of Longitudinal Studies. *Psychological Bulletin,144(10)*, 1045-1080. https://doi.org/10.1037/bul0000161

小塩真司・岡田涼・茂垣まどか・並川努・脇田貴(2014)自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響：Rosenbergの自尊感情尺度日本語版のメタ分析. *教育心理学研究, 62(4)*, 273-282. https://doi.org/10.5926/jjep.62.273

Ouschan, L., Boldero, J. M., Kashima, Y., Wakimoto, R., & Kashima, E. S.(2007). Regulatory focus strategies scale: A measure of individual differences in the endorsement of regulatory strategies. *Asian Journal of Social Psychology,10(4)*, 243-257. https://doi.org/10.1111/j.1467-839X.2007.00233.x

Peng, K., & Nisbett, R. E.(1999). Culture, dialectics, and reasoning about contradiction. *American Psychologist,54(9)*, 741-754. https://doi.org/10.1037/0003-066X.54.9.741

Robins, R. W., Trzesniewski, K. H., Tracy, J. L., Gosling, S. D., & Potter, J.(2002). Global self-esteem across the life span. *Psychology and Aging,17(3)*, 423-434. https://doi.org/10.1037/0882-7974.17.3.423

Rosenberg, M.(1965). *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton: Princeton University Press.

Ruble, T. L., & Thomas, K. W.(1976). Support for a two-dimensional model of conflict behavior. *Organizational Behavior & Human Performance,16(1)*, 142-155. https://doi.org/10.1016/0030-5073(76)90010-6

Safdar, S., Friedlmeier, W., Matsumoto, D., Yoo, S. H., Kwantes, C. T., Kakai, H., & Shigemasu, E.(2009). Variations of emotional display rules within and across cultures: A comparison between Canada, USA, and Japan. *Canadian Journal of Behavioural Science / Revue canadienne des sciences du comportement,41(1)*, 1-10. https://doi.org/10.1037/a0014387

齊藤和貴・岡安孝弘(2014). 大学生のソーシャルスキルと自尊感情がレジリエンスに及ぼす影響. *健康心理学研究, 27(1)*, 12-19. https://doi.org/10.11560/jahp.27.1_12

Sato, K., Yuki, M., & Norasakkunkit, V.(2014). A socio-ecological approach to cross-cultural differences in the sensitivity to social rejection: The partially mediating role of relational mobility. *Journal of Cross-Cultural Psychology,45(10)*, 1549-1560. https://doi.org/10.1177/0022022114544320

Schmitt, D. P., & Allik, J.(2005). Simultaneous administration of the Rosenberg Self-Esteem Scale in 53 nations: Exploring the universal and culture-specific features of global self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology,89(4)*, 623-642. https://doi.org/10.1037/0022-3514.89.4.623

Schug, J., Yuki, M., & Maddux, W.(2010). Relational mobility explains between- and within-culture differences in self-disclosure to close friends. *Psychological Science,21(10)*, 1471-1478. https://doi.org/10.1177/0956797610382786

Senzaki, S., Masuda, T. & Ishii, K.(2014). When is perception top-down, and when is it not? Culture, narrative, and attention. *Cognitive Science,38(7)*, 1493-1506. https://doi.org/10.1111/cogs.12118

Senzaki, S., Masuda, T., & Nand, K.(2014). Holistic versus analytic expressions in artworks: Cross-cultural differences and similarities in drawings and collages by Canadian and Japanese school-age children. *Journal of Cross-Cultural Psychology,45(8)*, 1297-1316. https://doi.org/10.1177/0022022114537704

Senzaki, S., Masuda, T., Takada, A., & Okada, H.(2016). The communication of culturally dominant modes of attention from parents to children: A comparison of Canadian and Japanese parent-child conversations during a joint scene description task. *PLoSOne 11(1)*: e0147199. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0147199

Shimizu, Y., & Uleman, J. S.(2021). Attention allocation is a possible mediator of cultural variations in spontaneous trait and situation inferences: Eye-tracking evidence. *Journal of Experimental Social Psychology,94*, Article 104115. https://doi.org/10.1016/j.jesp.2021.104115

高山草二(2007). ポジティブ・イルージョンと文化的自己観および動機の期待変数との関係. *島根大学教育学部紀要, 41*, 73-78. https://ir.lib.shimane-u.ac.jp/6510

竹村幸祐・結城雅樹(2014). 文化への社会生態学的アプローチ. 山岸俊男(編著)*文化を実験する：社会行動の文化・制度的基盤*(pp. 91-140). 勁草書房.

Talhelm, T., & Dong, X.(2024). People quasi-randomly assigned to farm rice are more collectivistic than people assigned to farm wheat. *Nature Communications,15*, 1782. https://doi.org/10.1038/s41467-024-44770-w

Talhelm, T., Zhang, X., Oishi, S., Shimin, C., Duan, D., Lan, X., & Kitayama, S.(2014). Large-scale psychological differences within China explained by rice versus wheat agriculture. *Science,344*, 603-608.

https://doi.org/10.1126/science.1246850

Tanaka A, Koizumi A, Imai H, Hiramatsu S, Hiramoto E, de Gelder B.(2010). I feel your voice. Cultural differences in the multisensory perception of emotion. *Psychological Science,21(9)*, 1259-62. https://doi.org/10.1177/0956797610380698

Taylor, S. E., & Brown, J. D.(1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin,103(2)*, 193-210. https://doi.org/10.1037/0033-2909.103.2.193

Thomson, R., Yuki, M., Talhelm, T., Schug, J., Kito, M., Ayanian, A. H., Becker, J. C., Becker, M., Chiu, C.-y., Choi, H.-S., Ferreira, C. M., Fülöp, M., Gul, P., Houghton-Illera, A. M., Joasoo, M., Jong, J., Kavanagh, C. M., Khutkyy, D., Manzi, C., . . . Visserman, M. L.(2018). Relational mobility predicts social behaviors in 39 countries and is tied to historical farming and threat. *PNAS Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America,115(29)*, 7521-7526. https://doi.org/10.1073/pnas.1713191115

外山美樹・桜井茂男(2001). 日本人におけるポジティブ・イリュージョン現象 . *心理学研究 , 72(4)*, 329-335. https://doi.org/10.4992/jjpsy.72.329

Uchida, Y., Takemura, K., Fukushima, S., Saizen, I., Kawamura, Y., Hitokoto, H.,Koizumi, N., & Yoshikawa, S.(2018). Farming cultivates a community-level shared culture through collective activities: Examining contextual effects with multilevel analyses. *Journal of Personality and Social Psychology. 116(1)*, 1-14. https://doi.org/10.1037/pspa0000138

Uskul, A. K., Kitayama, S., & Nisbett, R. E.(2008). Ecocultural basis of cognition: Farmers and fishermen are more holistic than herders. *PNAS,105(25)*, 8552-8556. https://doi.org/10.1073/pnas.0803874105

Wice, M., Matsui, T., Tsudaka, G., Karasawa, M., & Miller, J.G.(2019). Verbal display rule knowledge: A cultural and developmental perspective. *Cognitive Development,52*, 100801. https://doi.org/10.1016/j.cogdev.2019.100801.

Wojciszke, B., Bazinska, R., & Jaworski, M.(1998). On the dominance of moral categories in impression formation. *Personality and Social Psychology Bulletin,24(12)*, 1251-1263. https://doi.org/10.1177/01461672982412001

山田ゆかり(1989). 青年期における自己概念の形成過程に関する研究 :20 *答法での自己記述を手がかりとして . 心理学研究 , 60(4)*, 245-252. https://doi.org/10.4992/jjpsy.60.245.

Yamagishi, T.(2011). Micro-macro dynamics of the cultural construction of reality: A niche construction approach to culture. In M. J. Gelfand, C.-y. Chiu, & Y.-y. Hong(Eds.), *Advances in Culture and Psychology* (pp. 251-308). Oxford University Press.

Yamaguchi, S., Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Murakami, F., Chen, D., Shiomura, K., Kobayashi, C., Cai, H., & Krendl, A.(2007). Apparent universality of positive implicit self-esteem. *Psychological Science,18(6)*, 498-500. https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.2007.01928.x

吉田琢哉・中津川智美(2013). 対人葛藤対処方略の選択に対する関係目標の影響：接近―回避の軸に基づく検討. *実験社会心理学研究 , 53(1)*, 30-37. https://doi.org/10.2130/jjesp.1104

Yuki, M., Maddux, W. W., & Masuda, T.(2007). Are the windows to the soul the same in the East and West? Cultural differences in using the eyes and mouth as cues to recognize emotions in Japan and the United States. *Journal of Experimental Social Psychology,43(2)*, 303-311. https://doi.org/10.1016/j.jesp.2006.02.004

Yuki, M., & Schug, J.(2012). Relational mobility: A socioecological approach to personal relationships. In O. Gillath, G. Adams, & A. Kunkel(Eds.), *Relationship Science: Integrating Evolutionary, Neuroscience, and Sociocultural Approaches*(pp. 137-151). American Psychological Association. https://doi.org/10.1037/13489-007